

墮ちた先は人形道

杭打折

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時代の流れにあわせてなのか、仏教に語られる六道輪廻は七道に変化したらしい。

相変わらずオリ主強キャラではじめるフロントライン。寛容な心で読んでくださいませ。

目次

0 話	追想と記録	1
1 話	君の名は？	6
2 話	だーかーざんぶらつく	12
3 話	笑顔	18
4 話	WORKING	26
5 話	MONSTER	36
6 話	Black to White	47
7 話	NEW COMER	63
8 話	サプライズ	74
9 話	IMMUNITY	89
10 話	PUNISHER	100

1 1 話	FRIENDLY	116
1 2 話	ERRAND	129
1 3 話	INTERRUPT	138

0 話・追想と記録

20??年の冬、ロシア、サンクトペテルブルクにて――

都市であれば必ずどこかに一つは存在する、人気のない区画で、一人の兵士が一人の男に向けてライフルを向けている。

「諦めろ、お前は終わりだ。銃を置いて投降しろ。そうすれば絞首台で楽に死なせてやる」

だから賢い選択をしると、慮るような言葉遣いとは裏腹に、ライフルを構える兵士の目は冷ややかだ。

なぜなら、兵士の目の前に立ち、今は物言わぬ軀として赤いペンキを部屋にぶちまけている同僚から奪ったライフルを構えている男は、どちらにせよ死ぬからだ。支配機構によつて生存を許されていないのだ。

今ライフルを向けられている男が、何かの陰謀に巻き込まれたとかではない。知ってはいけないことを知ってしまい、口封じのために狙われているなどということでもない。

極めて単純で真つ当な理由が、其処にはある。世の誰もが肯定し、称賛するに足る理由で彼は殺されるのだ。

「そうカツカするなつて。俺がアンタに何をしたつて言うんだい？」

ケタケタとライフルを向けられながらも男は笑っていた。ライフルを向けている兵士の目に冷ややかな殺気が宿る。

「貴様は殺しすぎた」

「おいおい、兵士が殺しを悪と語るのかい？そりゃあ自己否定つてもんじゃあないのか」
「俺は貴様のような殺人鬼ではない。貴様とは違う」

大量殺人鬼——それが目の前の男の正体であった。

故、任務のため、仕事として人を殺す己とは違うのだと兵士は男を否定する。男は大量げさな仕草で嘆き悲しんだ。

「全く嘆かわしいねえ、人殺しに貴や賤があるものかよ。命は皆平等、道德の授業で習わなかったのかい？」

「生憎、俺はあの科目とは反りが合わなくてな」

兵士の目は細くなる。会話の合間、男の指先の位置が変わっていたことに気づいたからだ。まるで降参だと示すようにトリガーから離れていた指は、いつの間にか引き金の近くへと僅かにずれていた。兵士はそれに気づかないフリをしながら会話を続けた。

「へえ、ならあんたの考えはどうだい？聞かせてくれよ」

男は目を伏せ、寂れた笑みを見せて兵士に問う。しおらしく、自分の命を委ねたように見える。しかし、男の瞳が一瞬だけギラつくように輝いたのを、兵士は見逃さなかつた。

「こちらを殺す覚悟を決めたという事だろう。もともと生死の境に見を置くことの多い兵士は、気配の変化というものに敏感である。とはいえ、目の前の殺人鬼にも同じ事が言えるのだが。」

「命の価値は優劣は、存在する。大きく分ければ二種類だ」

「へえ？どんな種類だい」

引き金に指がかけられた。

「クズと、それ以外——お前の命はクズだ」

答えを聞いて、きひ、と男が嗤った。

男が投降する姿勢を見せながらも、捨てずにいたライフルの銃口が、兵士の眉間を捉えた。

一つの銃声が鳴り響いた。

作戦報告書——8月20日。

当内務省軍特殊部隊は、近隣での訓練への従事中、殺人を繰り返しながら逃走を重ねていた■■■■・■■■■■を捕捉。

かねてより危険人物として、内務省でもマークしていた人間であり、神出鬼没として知られていたため、司令部より確保命令が発される。

当部隊はベレゾヴィッチ・クルーガー大佐を指揮官として作戦行動を開始。

……作戦の経緯は、ほぼ黒塗りとなっているため省略。

当部隊は確保寸前まで任務を果たすも、対象が殺害した部隊員より強奪したAK—15ライフル（管理番号895）による抵抗をやめなかつた為、ベレゾヴィッチ・クルーガー大佐は己む無く対象を射殺。

以上の事からも、大佐の行動の正当性は認められるべきものであり——

……閲覧を終了しますか？

>YES NO

……閲覧記録を保存しています

……保存は正常に終了しました

……閲覧者がログアウトしました

1話. 君の名は？

間違いなく、俺は死んだ。

8月20日のサンクトペテルブルク。あの日は一日かけて町中を物色して過ごしたが、手に掛けたという獲物を見つけることができなかった。だから、その日は早めに切り上げて隠れ家で活動資金になる絵の作成あたっていた。

そして作業に没頭していた俺は、完成を目前にして軍の特殊部隊からの襲撃を受けた。

閃光弾、ガスに始まり次は鉛玉の雨霰。最初の攻撃はしのぐことに成功したが、連中から逃げることはできなかつた。

連中、隠し通路で逃走した俺にすぐ追いついてきやがった。そして銃撃戦が始まった。とは言っても真っ向から撃ち合うようなやつじゃない。頑張つて隠れて頑張つて一人ずつ仕留めてくようなやつだ。軍人、しかも特殊部隊と正々堂々やり合つて殺せるはずがない。

結果、何人かは返り討ちにしてやったが、指揮官であろう兵士にこちらの手を読まれ、追い詰められて殺された。

あと男、降伏しろとか言ってたくせに最初から殺すつもりだったぞクシヨウ。油断を誘おうと言葉を弄したものの、分かった時にはもう手遅れ。だからせめて相打ちに思ってたが、あの手応えだと生きてるだろう。

さて、再三言うが”俺”は死んだ。これ以上無いほど確実に。

しかし今もこうして意識は残って独白できているのは、なぜか。

答えは単純、”俺”は死んだが”私”は生きている。

どういう理屈だつて？ 私にもわからん。

分かっているのは、この身体が人間の身体ではなく戦術人形のものであるということ。

そして、この身体がAK-15という名の、試作型戦術人形であるということ。

奇しくも”俺”が最期に手にしていた銃と同じ名前である。その繋がりで、こうして今存在しているというのならば、AK-15は恩人ならぬ恩銃である。

弾が出れば銃なんてどれも大差ないと思っていたが、AK-15だけは特別だ。

Ypa、AK-15。Ypa、カラシニコフ。その弾丸に誉れあれ。

人から人形になったことで、当然だが姿も変わった。

外観データを基に説明しよう。

白に近い銀のロングポニーに瞳はブルー。口元以外をバイザー状のH ヘッドマウントディスプレイ M Dが

覆っているのを見えないが、顔立ちは整っていると断言する。人間基準に考えて美少女と呼べる部類だった。胸は軍用だというのに大きい。製作者の趣味だろう。”俺”としては賛同するが、”私”からするるといい迷惑だ。

リサイズの検討願も提出したが、その程度のサイズであれば支障なしとの返答が返され却下されている。人形に対する女性の権利意識とやらは発達していないらしい。

ここまで造型にこだわるのなら、S^愛id^玩o^人o^形として売ったら大した儲けになるだろう。しかし、私はれつきとしたT^戦id^術o^人o^形である。

しかも有り難い事に、世に多く出回っているという民生品を転用したものは異なり、設計段階からの軍用タイプ。

外骨格無しでパワードスーツ並の腕力を持ち、装備次第では更に向上する。反射速度、処理速度共に、非常に高く、極めつけは長期任務対応の為の自己修復^{イモータル}。

些か過剰なスペックという気がしなくもない、目も眩むような高性能ボディだ。

しかしその代償としてダメージリンク機能とやらを廃除しているらしい。当初は搭載予定だったらしいのだが、大人の事情^{予算不足}で駄目になったんだとか。

ただし、その分のリソースを制御ソフトに割いているので単体性能は寧ろ向上しているらしい。技術者とは逞しいものである。

強い体を手に入れて、失った命は戻らなかつたが人形として存在は継続するという好

待遇で復活した私にも、無視できない大きな問題が一つ有る。

それは、人形が人間を殺すのはまずい、ということだ。

人形は人間の創造物。謂わば道具に過ぎない。よって原則として人間に貢献するよ
うに機能するべきである。

その道具が、人間にとつて最もわかりやすく、単純にして最大の損害を与える方法で
ある殺害という行為を行つたらどうなるか。

簡単なことだ、廃棄処分になる。

流石にこの幸運がもう一度あるとは思えない。

死んだら殺せなくなってしまう。なので、可能な限り死を回避する方向で行動した
い。

まず絶対原則として、人間の命令には忠実に従うべきだろう。人間が私に与えたもう
た戦闘能力は人間ではどう足掻いても勝てない領域にある。

俺が死んだあの日の部隊も、この身体であつたなら容易く皆殺しにしていただろう。
もつと早くこの身体がほしかった。

そんな私が反逆をしたらどうなるのか。軍人達が理解していないはずもない。

これは予測に過ぎないが、私のボディには自滅機構のようなものが備わっている筈
だ。スイッチ一つで体が弾け飛ぶとか、そういう奴。

命令違反や反逆行為、それらに該当する行動を取った時にその機能が使われると思っ
ているが、流石に確かめる為に反逆するつもりはない。

結論から言うと、私にそれだけの力を与えても彼等には問題がないということにな
る。

更に言うと、人間には、それだけの力を私に与える必要があったという話でもある。
その必要性が何処から来るのかというのも、私にとつての問題に大きく関わってい
る。

この時代の軍が主に相手をするのは、E・L・I・Dという化物共である。

E・L・I・Dとはコーラップスとかいう物質の拡散により汚染された環境で、突然
変異した生物達の総称だ。見た目は一昔前の、ホラー映画で主役を飾るようなゾンビそ
のものである。

ただし、数だけやたら多く、個体の性能はゴミクズであるのが映画のゾンビ達だが、奴
らはそれとは異なっている。

奴らは数も居て、個体の性能もかなり高い。お陰で、人類側で対抗可能なのは軍隊だ
けという有様だ。

人間が人間と戦争をする時代は第三次大戦で終わってしまったのだ。

察しの良い諸君なら、ここまで言えば私がなんのために作られたのかを理解してくれ

るだろうと思う。

私ことAK-15は、対変異生命体用特殊戦術人形なのだ。

2話. だーかーざんぶらつく

唐突だが、ブラック企業というものを諸君らはご存知だろうか。

21世紀頃に広く極東で広まったというこの単語。要するに労働者を食い物にする闇の深い企業を指す言葉なのである。

そんな悪徳な企業は是正されて然るべきなのだが、悲しいことに、第三次大戦を経たこの世界においても、数多くのブラック企業はしぶとく生き残っている。

生前に関わりを持った知人の中にも、そこに勤めている人間がいたが、

曰く、新人研修でいきなり業務をやらされる

曰く、業務内容に対して薄給である

曰く、先輩が居ない

曰く、休みが取れない

曰く、人員は常に足りてない

曰く、入社してすぐよくわからない部署の役職を与えられ、辞められない

などの特徴があるのだとか。特徴を挙げればキリがないのでこれくらいにしておこう。

因みに当時の“俺”は無職である。知人の怨嗟のこもった視線と言葉を肴にアルコールを流し込んで笑っていた。

さて、なぜこんな話をいきなりしたのかだが、その理由を語るための前置きとして、少し前の様子をご覧いただきたい。

私が起動した直後、すぐ様検査がおこなわれた。慌ただしく動く技術者達の手により隅から隅までチェックが行われた。結果は全て基準値をクリアというものだった。

「今後、私は何をすれば良いのでありましょうか？」

完全、完璧であると豪語し息巻く主任研究員の姿に一抹の不安を覚える。私は、その不安や疑念を悟らせぬよう努めながら聞いた。

主任は上機嫌に答えてくれた。

「まずはおめでとう、AK-15。私が担当した以上当然ではあるのだが、君は極めて良好な数値を示す優良個体であることが判明した。よって、これより性能評価の為、実地試験を行ってもらう」

上機嫌な主任殿の朗々とした声音をうんざりとした気分ですらから左へ流していたが、ある単語が引つ掛かった。

なんとこの男、実地試験を執り行うのだという。随分と性急な話ではないだろうか。

試験場などでの試験を行いある程度データが出揃ったところで、さあ実地試験だとい

うのが普通だと思っただが。

色々と文句のつきたい試験工程ではあるのだが、人形である私に拒否権はなく、拒否できない以上、ある程度の結果を示さなければならぬ。

ならばと覚悟を決め、ならば開始の日取りも知っておかなければならぬ。

「実地試験はいつから行われるのでしょうか？」

私が問うと、主任殿は何を言っているのかとも言いたげな、意表をつかれたような表情を浮かべていた。

「はて。そんな変な質問だったとは思わないのだが。何かまずいことだったか？」

「AK-15、私は先程なんと言ったかね？」

問いかけてくる主任殿。まるで出来の悪い生徒に対して、これから懇切丁寧に教えるのだと言わんばかりの態度だ。

癪だが、我慢する。いつ自滅スイッチを押されるのか、誰がそのスイッチを握っているかわからないのだ。

私が死ぬのは御免だ。しかし、私が殺すのは大歓迎である。

「実地試験を行うと、仰られました」

「その通り。では、その際の私の発言、一言一句、違わずに、復唱してみたまえ」
なんて面倒なことを要求してくるのか。

ログを参照し、該当箇所を抽出。出力方法を音声出力に設定して……

——まずはおめでとう、AK—15。私が担当した以上当然ではあるのだが、君は極めて良好な数値を示す優良個体であることが判明した。よって、これより性能評価の為——これより？

「その通り！喜びたまえAK—15。君は製造段階から既に軍の備品ではあつたが、配備先は未定であつた。しかし、たつた今、君の配備先は決定された。新設される第31独立遊撃機械化実験小隊、その栄光の初代隊長として、任命されたのである。さあ出撃準備をしたまえ、戦場と変異生命体達が君を待っている！」

さて、最初の話に戻るとしよう。

我が尊敬すべし先達の語つたブラック企業の特徴達。

曰く、新人研修でいきなり業務をやらされる

——私の調整であれば君は自分以上に身体を動かせる筈だ

曰く、業務内容に対して薄給である

——君は自分の車に給金を払うのかね？

曰く、先輩がいない

——君が第一号である。後輩は君の成果次第だが、間違いなく予算は降りると確信している。

曰く、休みが取れない

——その為の自己修復機能である。補給の合間に調整も終わる筈だ。

曰く、人員は常に足りてない

——新設部隊だ。補充人員はいずれ、送られる筈だ。

曰く、入社してすぐよくわからない部署の役職を与えられ、辞められない

——何かな？不満だとしても言うのかね？

いえいえ、とんでもない。

ただ、偶然かと思うのですが、実に不思議なことに、私の職場環境がある特徴と完全に一致するのです。それは世の中ではブラック企業と呼ばれるものでして、この点、いかがお考えでしょうか？

え？ 私は好きな時に好きなだけ研究開発を行える現在の環境にはある程度満足をしている？

そうですね。そうですね。主任殿は好きなことと職務内容が合致してるんだらうさ。

しかし、我が麗しの主任殿は知らぬこと故、仕方ないと思うのだが、このAK—15の中身は、生前において自由住所不定無職な風来坊の男のメンタルである。

あなた方のように、理性と良心を職務に捧げた生涯とは縁遠いのです。その点をご配

慮頂ければと思うのですが。

「さあ準備をしたまえAK-15。ヘリの用意は済ませてある、出発は五分後だ」
「了解しました、では五分後に」

駄目みたいですネ。

五分後、一機のヘリが施設から飛び立った。

3話. 笑顔

生前、知人の中の一人が、こんな言葉をお口にしていた。

新人社員はまず家を出て3秒でやめたくなる。仕事を開始して3分で辞めたくなつて、3時間でまた辞めたくなる。3日、3週間、3ヶ月……その繰り返しなのだ——となるほど確かに、一理あるだろう。しかし、ヘリで移動を開始してから3分経過しているが既に何度辞めたいと思つただろうか。

汚染空域を行くヘリの中からこんにちは。どうも、AK-15です。

5分後に出発という主任殿の通知に逆らうことが出来なかつた私は今現在、ピカピカに新調された装備一式を身にまといながらヘリで作戦ポイントまで輸送されています。「降下ポイントまであと少し、準備は出来ているか？」

パイロットからの問いかけを受け、私は自分の装備を確認する。

新式と判る外骨格に、これまた綺麗なAK-15はマズルブレーキに焦げ跡一つないピカピカの新品。そのAK-15は銃身下部に40mm口径のランチャーを備えており、トップレイルには、名前は知らないが覗き窓の四角いサイトが載せられている。

胸元には投擲用のナイフに、各部位に予備マガジン。レッグホルスターにはPL-1

5という名前のハンドガンが挿されている。

これが私の基本装備であるらしい。基本装備とはつまり、これ以外にも装備が用意されているということだ。我々が主任殿の語るところによると、

——君の扱う外骨格は多様な作戦への適応を前提としている次世代型のプロトタイプだ。従来型のパワーアシストのみならず、高効率大容量のエネルギー伝達経路を内蔵しており、その性能は従来型の3倍！その結果、従来型では不可能であった各種オプションユニットの搭載運用が可能となり、兵士を兵器運用のためのマルチプラットフォームとして使用することができるのだ！

エネルギーパックが見当たりませんが、動力源の確保はどのように？

——目下、搭載可能な小型燃料電池を鋭意開発中である。

であるらしい。ところで、察しの良い諸君らであれば気付いてくれたと思うのだが、この外骨格、現時点で動力を搭載していないのである。

動力がなければパワーアシストは使えない。パワーアシストの使えない外骨格などで、全身拘束具と同じだ。

極東のクラシックカルチャーのように、消えるグレネードを投げたいとは考えていないし、そんな必要はないと考えている。

さて、問題の動力源だが、何処から確保するのかと言うと、私から確保するのである。

私の身体はもともと長期任務にも耐え得るよう、エネルギー生産能力や蓄電量が高くなるよう設計されている。

なので、主任殿の言うとおり、新式の外骨格を動かしながら作戦行動をとることは可能だ。

しかし、本来よりも消耗は激しくなる。身体に回すべきエネルギーリソースを別に回すのだから当然だ。更に、先程も言ったように私は蓄電量が多い。その特徴は多くの場面で利点として働くのだが、一回でより多くの補給を必要とするという面では欠点である。

特に現地での補給を行う場合、私は他の人形よりも多くの物資を消耗するのだ。

なお、非常に優秀な我らが主任殿は、そんな問題への対策を用意してくれていた。その対策とは――

「これを飲めって言うんだもんなあ……」

私の手に握られた300mlほどの飲料容器。その中をスライムかと思うほど粘っこく、茹でたほうれん草よりも濃色の緑色をした薬品が満たしている。

容器が透明なのは嫌がらせなのか。せめて、中身を見えなくする工夫をしてはいただけないものか。

いかにも不味そうだし、見るからに危険なこの暫定毒化合物。機密保護を目的とし

た、飲んだら死ぬタイプのやつだったりするのだろうか。

これを飲むなど、正直に言えば拒否したい。したいのだが、いざ必要となれば飲まざるを得ないのだろう。

私はエネルギー不足で死ぬのも、命令違反で廃棄されるのもお断りなのだ。

「ポイント到達、31試験小隊は降下用意せよ。尚、整備部門の腕は確かなものであると保証する——以上、試験の成功を祈る」

「31試験小隊、降下準備完了。心強い言葉に感謝します」

心強い言葉に涙が溢れそうだ。その言葉が技術部門の力を保証するものであれば私も少しは安心できたのだが。

パイロットの声に若干の憐憫の色が混じっているあたり、救えないのだが。

おっと、これ以上はいけない。ネガティブになりすぎて人間に批判的な思考をしかねない。

どれだけ現状に問題があったとしても、私は人間に肯定的なAIである。よって人間に批判的な思考を持つことなんて有り得ないのです。

労働は幸福であり、幸福を得るには労働をしなければならぬ。よって、労働できる事は幸福なのである。

つまり私は幸福。でも労働って対価があつて成立するものではなからうか？人形に

報酬って——黙ってる、余計な思考を混ぜるんじゃない。

印象操作のためにもとりあえず笑っておこう。上司に向けるビジネススマイルは必須スキルだと、我が先達も語っていた。

ヘリの後部ハッチが開き始めた。僅かな隙間から日差しが我先にと殺到する。

見渡す空はすこぶる快晴。屋外での活動にはあらゆる面において好条件が揃っている。

格納庫内にブザーが鳴り響く。一度目で立ち上がり、二度目で降下前のチェック——各機能正常稼働中。

三度目のブザーと同時に格納庫の床を蹴って空中へと身投げする。

「お姫さまの調子はどうだ？」

「何も変わらず、大人しいもんさ、新兵よりはいくらかマシだがね」

哀れだと思っていた。

生まれたばかりで、化物共と戦わされるAK—15という人形の事を可哀想だと、そう思っていた。

E. L. I. Dというのは文字通り、化物だ。2メートルを超える巨体が、肉眼で追

いきれぬ速度で迫り、見た目以上の腕力で人間を芥のように薙ぎ払う。そんな光景を何度も見てきた。

そこに、最新式の装備を数多与えてるとはいえ、人形とはいえ少女の見た目をした彼女が生き残れるとは思えない。にも関わらず、E・L・I・Dの徘徊する区域に単独で送り込むなんてのは、悪趣味だとしても言いようがない。

しかも彼女はつい先程稼働したばかりだと言うではないか。

正規軍の中でも過酷と言われる対E・L・I・D部隊でさえ、新米をいきなり前線に送り込むなんてことはしない。

そうしないのは、徹底的に訓練をしなければ肉壁にもならないからだ。

技術部門の連中の大好きなデータや、統計もそれを肯定している。

それだけに、今回の緊急突撃の説明を受けたとき、連中は馬鹿なのかと、思わずそう叫んでしまうくらいには馬鹿げている。

「不機嫌なのはわかるが、仕事は仕事、命令は命令。間もなく作戦ポイントに到達、お姫さまを届けた後もあるんだからな」

「わかつてる」

今回の仕事内容は不満であり、思わず不機嫌にならざるを得ないが、自分は正規の軍人。与えられた命令に従わなくては存在意義に反する。

人形も人間も変わらないな、と思わず苦笑した。

「ポイント到達、31試験小隊は降下用意せよ。尚、整備部門の腕は確かなものであると保証する——以上、試験の成功を祈る」

必要以上に言葉を掛けたのは、自己満足のためかもしれない。

必要以上にメカに感情移入をするのは良くないと分かっているが、職務に反しなければ許されて然るべきだろう。

「31試験小隊、降下準備完了。心強い言葉に感謝します」

はつきりとした返答。淡々と淀みなく返された言葉は、感情を感じさせない機械的なもの。それを聞いて、やはり機械なのかと思うと、罪悪感が少しだけ薄れる。

「っ……」

ハッチの開放操作を行っていた相棒が、隣で息を呑むのが聞こえた。

見れば口元を引き締め、いつになく真剣に操作を行っている。

機材トラブルかと思ひ聞か、異常はないと彼は答える。

実際、その後の投下作業は何のトラブルも無く、非常に理想的な流れで行われた。

だと言うのに、相棒の顔色は未だすぐれない。

重苦しい表情で、観測用のドローンを投下するスイッチを押したまま固まっている。

「どうしたんだ、問題があったなら言ってくれ」

明らかにいつもと異なる様子の相棒。そんな様子を見せておいて、何も無いなど信じられるはずがない。

「笑っていた……」

「は？」

笑っていた？あの人形が？

だからどうしたんだと言うのだ。

「嬉しくて楽しくて仕方がない、そんな風いきなり笑ってたんだよ……！」

彼の声が震えている。スイッチを押したままの指も小刻みに震えている。

彼が見たのは、それ程までに恐ろしい笑顔だったのか。

「いったい何なんだよ……」

彼にそうまで思わせる人形とはいったい何なのか。

技術部門はいったい何を作り、何を試そうとしているのか。

言いしれぬ不安が、芽生えていた。

4話. WORKING

正直、悔っていたとしか言いようがない。

この身体、私が想像していたよりも遥かに高性能だ。

それをまず最初に実感したのは、ヘリから飛び降りたその瞬間だ。

前もって言うが、生前において、“俺”にパラシュート降下の経験は無い。逃走のため少し高い場所からの飛び降りをした事があるくらいで、それを空挺降下の経験値に成り得ると考えるほど、私は物事を混同して考えられる性質ではない。

そんな私でも、慣性による一瞬の浮遊感を感じるとほぼ同時、次に取るべき行動が頭に浮かんだのだ。

気象条件的にどうすればいいのか、その結果どうなるか。

降下地点へと誤差なく正確に降りるための経路の算出、及び姿勢制御。

諸々の必要と思える情報を、この頭は意識せずとも出してくれる。

その結果、私はそれなりに快適なフライトを経験することができたと言っておく。いやはや、なんとも、楽勝である。

物事が順調に進むことがこれ程までに心地よいとは。

事態が容易く片付くことの、なんと素晴らしいことか。

今ならば、この性能を用意した主任殿に讚美歌を贈つてやらないこともない。

いや、冷静になるべきだ。浮かれていてはならない。

今は作戦継続中、しかも敵地のど真ん中。初期の敵地への移動を終わらせただけ。

E. L. I. Dとかいう、ゾンビのような化物たちに支配された地域。

そこに出向いて、我らが祖国の大地を汚す輩を片付けるのが、私の仕事。幸いにも、手早く片付ければその時点で帰宅できる業務内容だ。

ならば早い所済ませてしまおう。早く帰ることが許されてる以上、仕事を長引かせることは私に対してなんのメリットも無い。

さて、私が現実的な視点へと立ち返ったのは何故か、と思われた方もいるかも知れない。

そんな人には考えてみてもらいたい。浮かれている時に群れで迫ってくるE. L. I. D達を感知したどうなるだろうか。誰でも冷静になる。いや、ならざるを得ないと思うのだ。

敵は真つ直ぐ向かってきている。標的を私に定めた上での動きであることは明白だ。

私はまだ、何か行動を起こした訳ではない。なのに何故、連中は私を？

考えた結果、答えはすぐに出た。

降下中を捕捉された、それだけのこと。

至って単純な話だ。今日は快晴であり、空は澄み渡っている。だいぶ遠くからでも、パラシュートを開いて呑気に降りてくる間抜けの姿なぞ、捉える事ができるだろう。

それがE・L・I・Dに見られていたとしたら？

言うまでもなく、此方にやって来る。

気分はさながら、メアリー・ポピンズ。やって来る子供達に7・62mm教音の叡智を叩き込む。

レーダーをパッシブからアクティブへと切り替える。敵に位置を晒す危険性もあるが、既に敵はこちらを捕捉している以上、どうということはないだろう。今は、より精密な情報の探查収集を行うことが最優先だ。

群れの数はおよそ14、予定で聞いていた数の倍以上ある。本部にそのデータを叩きつけ、これはどういう事かと、お話を伺う。

「どうやら、周辺で活動中の別部隊の撃ち漏らしが、標的と合流したらしい」

伺ったところによると、なんと原因は別部隊の失敗によるものであるらしい。私は悪くないのに、その皺寄せが私に来るのは許しがたい話だ。

「当初の想定と状況が大きく異なる。作戦中止を求めるのなら、許可をするが」
なんと。

まさか作戦中止を選択する権利が私にあるというのか。

もしかしたらこの職場、私が思っていたほど黒くないのかもしれない。

出撃前に渡されていた情報では、私が相手にする群れは4、5体程度という内容であった。装備や弾薬はある程度、想定より数が多くても対応可能なように持たされているが、それでもせいぜいが7、8体程度が限度である。

倍以上の数を相手にしろというのは、あらゆる面において想定されていない話なのだ。だというのなら仕方ない。

中止しても問題なく、しかも私に非がないのなら迷うことはない。

「断じて許さんツ!!」

しかし、約一名ほど血迷っている方がいるらしい。

「AK-15、君の性能ならば敵群の殲滅は容易なはずだ。ならば何も問題なからう、中止する理由は無い!」

「しかし主任、AK-15はまだ稼働して間もない。初戦場で、この数のE、L、I、Dを単独で相手にするなど、成功の確率が見込めません」

管制が主任を抑えようと反論する。彼はきつと、極めて理性的な軍人なのだろう。是非とも、この邪神か何かと間違えたくなる科学者を抑えてほしい。

「君の判断の根拠を聞かせてもらえるかね?」

「士官として、管制としての判断故です」

管制官の声が重々しい。早くしてくれないだろうか、私は作戦を中止して帰りたい。「確かに、君ら兵士の経験則からくる考えは、我々科学者にとつては素晴らしい教材となり得る。しかし私は断言しよう、可能であると」

管制官の反論は、無い。主任の勢いに吞まれたか、それとも彼の立場に気圧されたか。いずれにしろ、唯一主任に抗弁する存在であつた彼が沈黙したことは、私にとつて非常にまずい。

「AK—15が人間であるならば、私も君の意見に賛同しただろう。しかし、君の経験則は彼女には当てはまらない。何故なら彼女は戦術人形だからだ。当初よりそのように製造されている。走れないように製造された車、銃弾を放てぬよう製造された銃が存在しないように、全ての製造物は人間の要求を満たすために存在しているのだ。故に――」

ヒートアップする主任殿の演説に、異を唱えようとするものはもう居ない。

人間達の中で、勝敗は決した。

まだ私が居るだろうか？

私はそもそも戦術人形だ、やれと言われればやるしかない。彼らのやり取りに口を挟んだところで、意見具申以上の意味を發揮することは難しいだろう。

それに、作戦中止を主張して戦意の不足したAIだと思われたくはない。

だがまあ、最後の抵抗として、それとなく主任殿の翻意を促すように試みる努力はしてみる。

「主任」

「何かね？」

未だ続けられている彼の演説に割り込むと、彼は若干不機嫌そうに答えた。

「想定外の事態にも関わらず、実験を強行する。失敗したら主任もただでは済まないと思いますけど」

「私を心配するか、これは愉快だな」

誰も心配してはいませんが。

反抗とは思われぬように、慮っているのだと思ってもらえるよう声音と言葉を使い分けた結果なので、否定はしない。

それに、嘘は言っていない。

このプロジェクト、予算が不足する程であれば、相当額の資金を投じている事が予測される。

そんな状況で、現状、唯一の実験機である私を失う事になれば、関係者全員が重く処罰を受けるだろう。

無線の向こうで、その事実を理解している誰かが息を呑む音がした。

「私は対変異生命体用の戦術人形。その成果は、確実なものが要求されるはずで。下手な成果など、彼らの不興を煽るだけではないかと、愚考しますが」

よし、主任が黙った。もう少し彼にリスクを提示して、今回の作戦を続行することにメリツトが無いと思わせなければならぬ。

確かに、この身体のスペックは素晴らしい。だからこそ、相当な金をかけているのならば、スポンサーには下手なものは見せられないはずだ。

主任達には確実に性能を示すことのできる戦場の用意が求められる。いかに主任殿が正気が危うい人間であるとはいっても、下手なものを見せて、資本からの怒りを買いたくはないだろう。理性的であることと損得勘定ができるできないは別問題であると、私は考える。

この戦いで私が敗北する可能性を提示して、スポンサーには悪印象をつけたくないだろうと遠まわしに伝える。

そんな危険な橋、貴方も渡りたくないでしょう？

主任殿がだまり、唸っている。予想通りの結果に私は内心でガッツポーズを作る。

人間は普通、リスクを提示した場合、二の足を踏む。それは誰にでも言えることで、そのリスクが大きければ大きいほど、追い詰められた状況であるほど有効だ。この状況は

その両方を満たしている。

まあ、余程の気狂いでもなければ安全策を取るだろう。

——しかし、この時の私は失念をしていた。

「ならばこそ、か。AK—15、君の云いたいことは理解した。であれば私も覚悟を決めたぞ」

そう、撤退するのも勇氣である。確実な勝利を得るための一時的な後退とは敗北に非ず。最後に目的を果たしたものがこそが勝者であるのだから。

「もし失敗したとしても、私がその程度のものしか作れなかつた事の証明に過ぎん。如何なる処分でも真摯に受け止めよう」

——こんな試験を計画した男が、正気である筈がないということ。

「迎撃し、殲滅をしたまえAK—15。我等にはそれ以外に道は無いのだ。そして、君は私の最高傑作であるが故に確信する。一蓮托生に値する、とな！」

この、大馬鹿者が！

できることなら数秒前の自分を殴り飛ばしたい。

何故この男が普通と同じだと考えていた！

追い詰められて、籬を外すタイプだと、考えればすぐわかつたはずだ！

こんなマッドと同じ蓮の上に乗るなど、此方から御免被りたい。

今からでも遅くないので主任殿、私とは別の蓮に乗っていただけならどうか。

「さあ行け、敵は目前まで迫っている。観測機を惜しむつもりはないぞ、存分に性能で圧倒してきたまえ！」

ああ、もう、人の話を聞く気もないようですね。

ともなれば、我らに残された最後の良心。助けてください管制さん。

「軍としても、あのE. L. I. D達は此処で殲滅をしたい。逃せば更に大規模の群れを形成する可能性がある。しかし、正規部隊も取りこぼした連中だ。留意して掛かれ」
思いやりを頂けるのなら、せめて、作戦中止の命令が欲しいのですが。

「武運を祈る」

どうやら、これは逃げられないやつらしい。

崖から飛び降りさせぬよう、ギリギリまで追い詰めるつもりでいた私だが、いつの間にか主任殿と仲良く紐無しバンジーを敢行していたのだ。

飛び降りたのは主任だが、飛び降りさせたのは私である。しかも相手は勝手に、私が笑顔で手を繋いでいると思ってる。

なんという間抜けか。

「AK-15、了解。一匹たりとも逃さない」

こうなってしまうたら、私がどれだけ理屈を捏ねようと、最早無意味だ。

出来る事はせいぜい、存在意義を最大限果たして、意図せず見せつけることになってしまった有用性を、人間に示してやることくらいのもだろう。

——死ぬのは御免だ。しかし、私が殺すのは構わない。

正直に言おう。人間が相手でない殺しには興味なんて無いし、進んでやりたくもない。

その相手が化物で、死ぬかもしれない事案など忌むべきものであることに間違いない。

だが、そこから逃げられないのなら？

少しでも好きになれるように、努力するのが建設的というものでもある。

”俺”が生前、そうしたように。

折り合いをつけて、うまく付き合っていくしかない。

「AK-15、交戦開始！」

さて、腹も括ったところで、せいぜい足掻くといたしましょうか。

5話. MONSTER

私は管制としてベテランとまでいかないかもしれないが、それでも数々の経験を積んできたという自信がある。

管制士官としての任についたのは、この汚染された世界にE・L・I・Dという化物が姿を表して、凡その対抗戦術が確立され始めたころだったと記憶している。

様々な戦場を見てきた。甘美なる勝利も、唾棄すべき敗北も味わってきた。

故に断言しよう。

AK-15は無事では済むまい。出来るとしてもせいぜい時間稼ぎで、その中で1体でも削ってくれば大金屋。

それが管制としての経験則と人形という単一戦力を客観的に評価した上での結論だった。

あの、技術部門肝入りのプロジェクトの産物だ。さぞ高性能なのだろうとは思う。

しかし、それが通常の戦術人形の発展型であるというのなら、群れを成したE・L・I・Dに勝てるとは思えない。

だからAK-15には、救援要請を受け取った近郊の部隊が駆けつけるまでの間、E・

L. I. Dの群れを引き付けて時間を稼ぐことを期待することにした。

その中で1体でも倒してくれたのなら、後に訪れる正規部隊の負担が大幅に軽減される事となる。

よって、管制としてAK—15に与える指示は一つしかなかった。

「AK—15、遅滞戦闘に従事せよ。可能な限り数を減らせ」

E. L. I. Dは同族以外への強い攻撃性を有している。今もAK—15へとまっしぐらに向かっているのはそれが理由だ。

そして一度見つけた標的は完全に見失うか、獲物が死ぬまで追うのを止めない。

つまり此処でAK—15が逃げ出したとしてもE. L. I. D達はそれを追いかける。そうして少しでもAK—15に時間稼ぎをさせることができれば、捕捉したE. L. I. Dたちの群れを見失うことはなく、更にAK—15の攻撃により損耗を与える可能性もある。

要するに、餌役をやらせようという事だ。

良心の呵責が無いと言えば嘘になる。しかし、それを考えていられないのが管制である己の立場でもある。彼女が人間であったとしても、同様の命令を与えただろう。

「AK—15より管制へ。任務の意図は了解。攻撃の方法は、私に一任されると考えてよろしいか」

「無論、許可する」

もともと、今の状況でAK-15がE・L・I・Dを倒すのはあわよくば程度の期待だ。

それに、ある程度現場が好きに動くほうが、うまく回るものでもある。

私はAK-15の提案に許可をした。

直後、その返答を後悔することになる。

しかし、誰も小官を責める事はできないはずだ。

いったい誰が、E・L・I・Dの群れに突撃するなど想像できるというのか。

「AK-15、遅滞戦闘に従事せよ。可能な限り数を減らせ」

皆様こんにちは、AK-15です。どうやら管制士官殿は私に時間稼ぎを行わせたいらしい。

まあ、妥当な判断だろう。常識的に考えて、単騎で立ち向かうには彼我的戦力差が開きすぎている。

間違いなく、近隣へ緊急出動の要請も出していると予測する。なら、現場の私に時間稼ぎをやれというのは、当然の帰結。

戦術人形の使い方としては妥当といえる。

幸いにも管制士官殿は現場でのやり方にはそれほど口を出さない御仁である様子。戦い方は私の好きなようにしていいたい。

自由にしていいという権限は何とも清々しい。

さて、理想的なのは、此方に迫る敵を撃ちながら後退して距離を維持し続ける漸減戦術。

しかし、私はそれを早々に諦めた。諦めざるを得なかったというのがより正確な表現か。

試してはみたのだ。敵の動きは実に素早く当てるのは困難だったが、何発か撃てば感覚も掴めた。350 m程の距離からであれば、脚や胴体を狙い撃つことは出来るだろう。

しかしだ、連中は止まらなかった。

おそらくは、異常に活性化している筋肉の鎧が原因。直撃し、皮膚を貫いたとしても筋肉に受け止められて、貫通するに至らないのだ。

素材が人体であった事を疑いたくなるが、猪猟や熊猟においても、散弾銃などの弾では野生の獣の筋肉や密度の高い脂肪を貫通できないという。

自分が相手にしているのは軍隊も手こずるような化物連中。常識で語る相手でもな

いと思えば、納得も行くというもの。

それに、言葉を飾りはしたが実に単純な話なのだ。

要するに、今よりも更に的確に急所を狙わなければならなかったというだけ。

さて、人間サイドからのオーダーは遅滞戦闘と、敵を少しでも多く狩ることときいてる。

無論、最低限のノルマとして当初予定されていた数は狩らねばならないのは言うまでもない。

そして、今では口走ってしまった事を後悔しているが、一匹も逃さないと言った以上は14体全てを撃滅するくらいの気概は見せねばならないことも付け加えよう。

となれば、突撃という選択肢が最有力候補に上がってくる。

結局の所、離れた位置から撃って駄目なら、近くで撃つという選択肢しかないのだ。相手にダメージが行くまでチクチクと遠くから嫌がらせを繰り返すというのは、弾薬不足がそれを許さない。

それに、これは存外妥当な戦術でもあるのだ。

敵から逃げる戦術を採用したとしよう。距離を保つ速度を確保するには、外骨格と躯体にそれなりの量のエネルギーを回さなければならぬ。

さて、私のエネルギーが尽きるまで何体倒せるかだろうか。

ノルマ分を達成することすらも厳しいと、私は答える。
しかし、接近してしまえばどうか。

此方の攻撃方法は多少なりとも増えるし、距離減衰を受けている弾薬も多少はマシになつて火力と共に命中率もあがる。

加えて連中、頭数は多いが、私一人に対する戦力としては過剰にもほどがある。

私を追い詰め、群れとして狩りを行う分にはそれはデメリットとして目立たないだろうが、私が正面から衝突することを選択したら話は変わる。

端的に言つて、戦力を持て余すのだ。

武器を持たず、近接戦を主体とするE・L・I・D共にとつて、一人の交戦距離に留まれるのは3体ほどが限度。

ほかは自分の手番が回ってくるまで、味方の邪魔にならないように待機しなくてはならない。

群れという一個集団である敵と、あくまで個人である私。その時点で既に、機動力に雲泥の差が存在している。

戦闘の規模を小さく、狭い範囲で行うにつれ相手の数的優勢はその価値を劣化させるのだ。

つまり、圧倒することは不可能でも対等に渡り合う事は不可能ではないということ。

仕掛けるのも、離脱するのも、そのタイミングは非常にシビアになることは否めないが、
 ようは私が見誤らなければ良いだけの話。

実に、実に簡単な理屈である。

あとはこの机上の空論を実戦で証明すればいい。

我が事ながら、簡単に言ってくれ。しかし、やってやろうではないか。

敵との距離は既に200メートルを切っている。その場合、此方も最大加速で近づいたとして、接敵は4秒程か。

相対速度と互いの質量から衝突で生じる運動エネルギーを算出——行けそうだと見切りをつけ、地面を思い切り蹴つとばす。

周囲の景色が早送り映像のように変化する中、それ以上の速度で正面から接近してくるE・L・I・Dの最先鋒を視認する。

一步、二歩、と接近する中で敵も此方を視認。迎え撃つため、丸太よりも太い腕を振りかざしている。

互いの衝突まであと5歩もない距離、時間にして0.1秒にも満たないその刹那、強化外骨格脚部に仕込まれている指向性爆薬をセツト、トリガー^発。

数歩の距離を刹那で詰める加速を得て肉薄。E・L・I・Dは愚鈍にも拳を振りかざしたまま、醜い双眸を想定外だと見開き、見つめる私とバイザー越しに目が合った。

黄色く濁り血走った眼球。原形を失っているその顔は、目の前の相手が男だったのか女だったのかさえ不明なほど。

見るに堪えない醜い顔は、私の精神を不快な感情で満たす。

さて、話は変わるのだが諸君はゾンビの倒し方はなにかと言われたら何を浮かべるだろうか。

燃やす、バラバラにする、銃殺、ミンチ、車で突き飛ばす、溶鉱炉に落とす……色々あると思う。

では、最も早く倒すには、と聞かれたらどうか。

そう聞かれたら大勢はきつと、頭を破壊すると答えるだろう。

そのとおり、大正解だ。

広域性低放射感染症——要するにE、L、I、Dと略される病を発症した者達は超人的な身体能力を有する化物に変化する。

しかし、彼らの身体は強化されているとは言っても、基本的なメカニズムにおいては元になった生物と大差ない。

脳が思考を司り、身体全体に指示を出す。

よって、頭部を破壊することは連中に対抗する手段として非常に有効なのである。

感想から告げると、E・L・I・Dの頭を蹴り砕く感触は、心地よいとは到底思えないものだった。

まず最初に伝わるのは硬いものを蹴った感触。だが次の瞬間には硬度をなくし、やがて形も喪った。

胸の内を満たすのは、急所の粉碎に必要なエネルギー量の計算結果。幸いにも、私の主火力となる弾薬でも、今の距離からであれば数発叩き込めば破壊できると判った。

達成感と呼べるものは、無い。

生前散々味わった歓びは、少しだつて顔を見せてはくれない。

異形とは言え人の形をしているものを破壊するのだから、似た感覚は得られるかと期待していた部分があるのは否定しないが、どうやらそれも駄目らしい。

あまりにも人間から外れすぎているからなのか、私が彼らを人間とは少しも見做せないからなのか。

それとも、私が既に人間で無いからなのか。

理由はわからないが、いずれにせよ私の欲求を満たすには至らない。ならば、早く終わらせて帰りたい。

除染措置を受け、身体に飛び散ったE・L・I・Dの体液をシャワーで洗い流したい気分だ。

「よ……っ」と

蹴り飛ばした衝撃の反作用を駆使して減速。頭を失ったE・L・I・Dの身体は踏み台にするには申し分ない屈強さだ。有効活用する以外の選択肢はない。

E・L・I・Dの分厚い胸板を足裏で蹴って姿勢を制御、連中の頭上を跳び越える高さで宙返りしつつ眼下を見下ろし、戦況と配置を把握。

敵、残り13体。

見上げる彼らの足元は一樣に挟れている——急制動をかけて此方を捕捉した段階。

敵が動きを止めることを優先してくれたおかげで、此方は未だに完全に包囲されてはいない。

初動としてはまずまずの成果。

敵の位置情報を把握する。即座に排除すべき対象は、3体。

次の狙いは定まった。

着地点点へ落着くと同時に外骨格を強制駆動、ライフルの照準がびつたりと、こちらに向けて手を伸ばしている獲物の頭部へ。引き金を引いて、頭部を粉碎。

使用した弾薬の数は、きっちり計算通り。

なるほど、ふむ。

どうやらこの戦い、勝てそうだ。

6話・Black to White

第31独立遊撃機械化実験小隊戦闘詳報

1. 形勢

新たに出現した上位個体が群体を形成し周辺地域への脅威となることが不可避の状況となったため、第24独立新鋭自動車化狙撃旅団が、これの撃滅作戦を実施。

我ら第31独立機械化実験小隊（以下、31独立小隊とす）は、この作戦進捗に伴い、近隣に散在する小集団の排除のための部隊展開を実施した。

単体においても戦局を左右しかねない変異生命体を排除することは、主力部隊の作戦遂行のためには不可欠である。また、新たな生命体群形成と統率型の出現を未然に防ぐという点において重要な効力を持つ点を重く見た参謀本部の決定に従ったものである。本詳報は作戦の正当性及び妥当性について議論するものではなく、この様な事前の情勢が存在していたと認識を共有を行うために記載するものとする。

2. 作戦実施区域の敵勢力

事前情報として得ていた数は以下の通り。

人型……4体

獣型……3体

しかし、戦局の推移の結果、主力部隊は目標の一つであった統率型撃破を、他の目標達成と兵士たちを犠牲にすることで達成していたが、正規軍主力が多数の打ち漏らしを拡散させたことにより、31独立小隊の担当する地域の敵戦力は以下のように変化していた。

人型……10体

獣型……4体

なお、前述の情報については連絡の混乱により、主力部隊から31独立小隊への伝達が遅れたため、出現まで察知できていなかった。これについては実に憂慮すべき事項であり、今後は優先的に情報が伝達されるよう、現場指揮官の資質的要因も考慮した指揮系統の改善を見込むべきものである。

3. 戦果

空挺降下後、直ちに交戦。部隊の戦果は以下を報告する。

人型……撃破8、捕獲2

獣型……撃破4

捕獲したE・L・I・Dは生体サンプルとして、撃破したE・L・I・Dは回収可能

な部位に凍結処理を施して回収。残りは辺り一体を含めて焼却処理を施して廃棄。

『 その他、消耗品については……』

正規軍参謀本部第2会議室。

はらり、と最後のページを捲くる音が空気を打つ。

参加している者達は皆、黙々と手元の報告書を眺めていた。彼らがどういう身分であるかは、肩章の星と勲章の数で物語っている。

その場での議事進行役を任せられた一人の士官は、貧乏くじを押し付けてきた上官を内心で呪う。この会議室の空気を吸うくらいなら、上官のように、デスクでのうのうと不味いコーヒーを啜っている方が遥かにマシだった。

「これが、例の新型の作戦結果か」

「はい」

「にわかには、信じ難いな」

「ですが、事実です。先程ご覧いただきました戦闘中の映像も、一切の編集が加えられていないことを確認済みです」

参加者である、一人の高官の投げかけた問いかけ。士官もその気持ちはわかる。まさ

に前例のない戦果、旧世代のプロパガンダの方が、まだ信じられる。

しかし、紛れもない事実であると、士官は答える。

「そうか……」

澆刺と、淡々と、事実であるという士官の回答を受けた彼は腕を組み、重苦しい表情で思案する。

ツンと、会議室の空気に張り巡らされた沈黙。

先ほどとは別の出席者——ダークグリーンを基調とする野戦将校服を身に着けた將軍が口を開き、士官に問う。

「損傷は軽微とあるが、どの程度か？」

「はっ」

問われた士官は手元の書類から確認した内容を報告する。

「外骨格及び左腕部のフレームを損傷、その他は軽微な損傷にとどまっているとのことです」

この戦いでAK—15が負った傷は、人間で例えるなら左腕部の、橈骨と尺骨の骨折に該当する。人間なら3週間以上の期間を要する重傷だが——

「なるほど、軽傷だな。次の作戦への投入は問題なさそうだ」

「でしような。これだけの戦果を挙げられるのなら、送り込む場所には困りませんまい」

所詮は、戦術人形。

基幹部分にかかわらない損傷なら、部品の予備があれば即日で修復可能な程度の軽傷。

だから、この参加者は、AK-15に対して再度作戦への投入は即時可能だろうという判断を口にした。他の出席者も、同調するように頷いている。

戦力としての有用性を共通認識として懐いた高官達は、受けた士官は、言いにくそうな眉間に皺を寄せた。

「その件についてなのですが……」

「なにか、未記載の問題かね？」

怪訝そうに眉を寄せ、将軍は担当の士官へと視線を向ける。その目に若干量込められている庄の意味は、報告していない情報があるのかと咎めるもの。士官は咄嗟に、違うのだと答える。

「詳細は別の報告書に記載しておりますが、技術部門より義体の自己修復機能の検証を行いたいという要望が出されています。また、追加戦力として同型の増産許可と資金投入の要求も」

「修復期間は？」

「同部門主任研究員からの資料によれば、最低でも1週間は欲しいと」

「長過ぎるな。それに追加資金だと？ 既に巨額の資金を投じているはずだが？」

一人の高官が口元を気難しそうに歪め、苛立たしげな口調で問い詰めた。

他の出席者も、それに賛同するように口々に懸念を吐き出していく。

優秀な戦力なら、出し惜しみは不要。

投入している予算以上の戦果は早急に回収すべきである。

人形で新式の高性能義体の検証実験を行う必要性は希薄である。退役軍人を管轄する省庁にやらせた方が軍としての体面も良い。

技術部門からの求めを却下する方向へと流れている参謀本部の流れを見て、士官もやはりこうなつたかと考えを浮かばせていた。士官個人としても、一体の人形で多様な技術の検証実験を行うというのには反対だった。

医療技術なら尚更だ。E・L・I・Dとの戦いで身体を欠損し、今も苦しむ同期のことを知っている。

より高度な義体技術が開発されたのなら、今も苦しむ彼らに優先して回すべきなのではないか、そう考えてしまう。

「まあ、考えても仕方あるまい」

参加者の中で、今まで沈黙していた一人が口を開いた。同時にしんと静まり返る会議室。それぞれ思い思いに技術部門に対する否定的発言を行っていた高官たちも、口を閉

ざして彼の意見に耳を傾ける。

「投資分の回収は将来的なものとして、多少の便宜を図ってやるべきだと私は考えるが」
カーター將軍と呼ばれた男は、左手で顎髭をなでながら首を縦に振らず、肯定。

この場の中でも随一の発言力を持つ人物が示した態度に、場はざわめく。

対E. L. I. D特殊部隊を率いるカーターの発言力はこの会議の参加者達の中でも随一を誇る。それは今までの流れを覆し、方向性を決定し得るほどですらある。

高官達は互いに目配せをし、一人が押し負けておらずと口を開く。彼は今回の作戦の責任者でもあった。

「つまり、カーター將軍は要求を受け入れることに賛成と？」

「ああ」

「有用な戦力を有効に活用するためだ。支援を惜しむ必要はないだろう」

躊躇いなく、確りとした口調でカーターは答える。そして、視線を会議室の端から端まで移動させ、他の出席者らから反論が上がらないことを確認し、そのまま言葉を続ける。

彼の語る支援というのが戦力増強に関するものであると、参加する面々は理解していた。その根拠が、正当な論理によって成り立つものであるということも。

それでも先程まで彼らが技術部門の要請を批判していたのはなぜかと言えば、一つの

理由があった。

「私とて、鉄血工造の一件を皆が懸念しているというのは理解している」

その名は、蝶事件。

鉄血工造と呼ばれていた軍用戦術人形を主力商品としていた大手企業がテロリストに襲撃され、管理AIが暴走した末、人間に反乱。人類にとつての敵対勢力となり、民間軍事企業に委託せざるを得ない状況が続いている。

この事件以降、戦術人形の運用を積極的に行っていた軍は方針を変え、人間との混成部隊を主体とする方向へと切り替えた。軍内部でも戦術人形反対派の意見が力を持ち、特に軍の意思決定の中枢たる参謀本部はその色が強くなりつつある。

AK-15が戦果を挙げたにも関わらず、技術部門の要請に反対意見が多かったのは、参謀本部全体にそういった風潮が蔓延していることが原因でもあった。

「しかし、技術部門の行う新型人形と運用方法の研究は、E・L・I・Dとの戦争に打ち勝ち、人類を存続させるために必要不可欠。改めて、重要性の再認識を行うべきだと思うのだがね」

しかし、戦術人形の研究は必要であると、カーターは全員に向けて断言する。その言葉に、反論するものは居ない。

戦術人形の持つ対E・L・I・D戦闘でのアドバンテージは、鉄血の反乱により人類

の生存領域が大幅に縮小したことからも証明されている。人間では、E・L・I・Dとの戦闘によつて汚染され、感染者になつてしまうことすらある。そう言つた意味でも、戦術人形の研究は必須といえるものである。全員が人形の研究の必要性を、頭では理解していた。

「將軍の仰ることは理解しています……ですが、現状の予算では追加のダミーリンクを用意する事は不可能です」

予算の不足——それだけは、理屈ではどうしようもない部分だ。そんな懸念を口にする高官の言葉を、心配は不要だとカーターは首を横に振る。

「なにも、ダミーである必要はあるまい。既存の人形をこの部隊に組み込めば良い。戦力増強の要請にはこれで十分だろう」

カーターは参加する面々を見渡して、問う。

「さて、異論が有る者は？」

どうも皆様、こんにちはAK—15です。

初任務で送り込まれた戦場は、実に最悪な環境でしたがなんとか生き延びることがで

きました。

命のありがたみをひしひしと実感する今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。さて、私が相手にしたE・L・I・Dとかいう化物どもは、やたらめつたらすばしっこいくせに馬鹿力で、奴らの攻撃は直撃すれば被害甚大。

しかも、攻撃を加えたとしても致命傷でなければすぐ再生。

再生機能は私もありますが、連中ほど優れてはいないのです。一応これでも、私は最新技術の塊なのですが、これは生命の神秘という奴なのでしょう。

とはいえ、心臓の破壊や頭部の破壊でなんとか出来るのがわかった。まだやりようはあるというのが初仕事の感想です。

主な戦い方も、今回の作戦である程度構築できました。

遠距離においては狙撃し急所を狙う。しかし、私の弾との相性はあまり良くありません。

中距離では、面制圧射撃。しかし弾薬消費量が多いため、非効率的。

最後に、近距離での戦い方。ナイフで体組織を切り裂いて急所を露出させ、そこに弾丸を叩き込む方法。弾薬節約にもなるし、なにより早く敵を倒すことができるのです。

とまあ、そんなこんなで最初の作戦を乗り切ることはできたわけだが、実は一つだけ失態を犯している。

「AK-15、破損した左腕の修復率を報告したまえ」

「はい。今朝時点で60%ほどまで完了、明日には接合工程に入れるかと」

「素晴らしい、計算通りだ」

私の返答にたいそうご満悦な笑顔を見せて、何度もうなずく技術主任。

それに半ば呆れつつ、固定具に支えられた左腕を見下ろす。私の失態とは、敵の攻撃をガードした際に腕を破損したこと。

かなりの威力をもった攻撃だったので、受け止めれば腕を破損するのは必至だろうと分かっていた。しかし、どうせ修復機能を稼働させれば一日ちよつとで治るものと、安心してたかを抱っていたのだが――

『君が腕を大幅に損傷してくれたことは実にありがたい。君の骨格は実に芸術的であり、設計の陣頭指揮をとった私としては図面を眺めるだけでも恍惚とできるものだ。実はそのせいで、今の今まで君の自己修復機能を試すことができていなかったのだ。ああ、あの美しい基礎フレームが破壊されたのは実に惜しいが、これはいい機会だ。再生機能は通常モードで稼働させ、完治するまではしばらくはそれで過ごしたまえ』

私が損傷をしたと知った途端、目の前で私の経過観察データを眺めて高笑いをしていくこの主任は、嬉々とした表情でそうのたまいやがったのです。

とまあ、そんなこんなで傷病生活が始まったのが数日前。私は今、診察を受けている。

嬉しそうにデータ達に向き合って、素晴らしいと何度もこぼしながらパネルを操作する様子を眺め、思わずため息が出てしまう。

「主任殿、意見具申許可を」

「なにかね、許可する」

私は、これ以上の傷病生活は無意味であると考えていた。

すでに経過観察データはある程度確保しているだろうし、自己修復機能が正常に働くことも確認されている。これ以上実験をしても、データの精度を上げる以外のメリットが浮かばない。というか、正直なところ、片腕を使えないというのは実に不便なので、すぐにでも終わらせたい。

「これ以上の自己修復機能使用は不要ではないでしょうか」

「不要かどうかは私が判断する。君は黙って従ってたまえ」

「ですが、これでは緑に身体を慣らす事や時間潰しも出来ないのですか？」

暇潰し、というのは絵を描くことや、音楽演奏といったところだ。生前では現場の記憶を抽象化したものを描いては闇市に流し、活動資金を得る手段にしていたものだ。

これが意外といい金になる。

特に資産家連中からの評判が良かったらしく、仲介人からは作品を出す度に喜ばれたものだ。そのお陰か、生前の“俺”の評価の一つには「独自の美的感覚で生命に彩りを

与え、有終の美を演出する殺人芸術家」とかいうものもあつたらしい。ウケる。

もう一つの趣味の音楽演奏については、幼少期に受けた教育の結果である。ある程度の楽器は人並みか、それ以上に扱える。

ただ、音楽演奏は片腕しか使えない状況でやるつもりはなく、絵を描く事も同様である。現状出来る訓練はといえば電腦空間上での戦闘演習。どちらも、この数日間で飽きるほどやり尽くした。

加えて、この施設には娯楽がない。そのせいで今の私は、これ以上ないほどに暇なのだ。

戦闘に出なくていいので非常に楽なので歓迎ではあるのだが。

「なら、君に仕事を与えよう。君の小隊に一人の人形が追加戦力として送られてくるといふ連絡があつた」

なんと。

私の部隊に人員が追加されるらしい。先日提出した報告書の中で、人員補充の重要性をくどいくらい書き連ねた甲斐があつたというもの。

使える人員なら素晴らしいが、使えない人形でも私の弾除けくらいにはなる。どちらに転んだとしても、私にはメリットしかないのである。

現状、これを喜ばずして何を喜べという。

今もブラックな職場で働いているであろう我が先達へ。君は人員補充がされないことを嘆いていましたが、我が職場は少なからず改善に向かっているようです。

「それは朗報ですね。人員の詳細は頂けますか？」

「今送った。確認したまえ」

接続しているネットワークを経由し、人形のデータが私に送られてくる。即座に解凍し、確認。その内容に、思わず小躍りしたくなる。

「盾持ちの前衛ですか。素晴らしい」

武装はショットガン、可動式アームに保持された盾を持つ、重装甲型の前衛タイプ。性能も軍用準拠、文句なしの一言に尽きる。

ああ、素晴らしきかな。X o p o r o、E x c e l l e n t、T r a s b i e n、B r a v o!!

参謀本部の御歴々の決断に喝采を。小隊規模の編成が可能な人員であれば、更に素晴らしかったのだが、この際贅沢は言うまい。

「君の部下につけるが、実戦経験は君より豊富だ。その辺りも含めてうまくやることだな」

「信用がありませんか」

わざわざ言葉にして、新人とのトラブルを心配された。不服ではあるが、それ以上に

彼がそういった人間関係の話題を振ったことに驚いていた。

「最初の作戦でパイロットに転属願を出させておいて、信用もなにもあるまい。彼を引き抜くのにどれだけ苦労したと思ってる？ん？」

「それについては、本当に心当たりが無いのですが……」

これについては本当だ。私の最初の作戦後、ヘリパイロットの二人組の片割れが、帰還後即転属願いを出したらしい。あまり話しても居なかつたし、変なことをした覚えもない。ただまあ、この職場環境はよろしく無いので、その辺りだろうと思っている。

私の返答を聞き、主任は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「まあいい、今更彼の事を気にしても仕方あるまい。AK-15、君は追加人員の人形を迎えに行きたまえ。腕が折れていてもそれくらい容易かろう」

「わかりました。では行ってきますよ、主任」

そう言って、再び端末のデータとの熱いハネムーンに旅立った主任に背を向け、待ち合わせ場所への移動を開始する。

「確か、名前は……」

歩きながら、名前は把握して置かなければと思い至る。プロフィールを再び開いて個体名を確認する。

「サブリナ」

それが、その人形の名前らしい。

7話・NEW COMER

「軍人さん、何か買っていつておくれよ。軍票使ってくれたらサービスするよ！」

——いえ、軍務中ですから

「おや士官さん、腕を怪我してるんかい？なら荣誉が豊富なこいつをだね」

——ああ、いや、間に合ってますので

軍人というのはどうやらかなりの人気者のようです。街に出た途端いろんな人から声をかけられ、私は若干困惑しております。

まあ当然といえば当然かもしれない。今の時代において、軍人というのは最も安定した職業の一つに入っています。

さて、今の私の格好はバイザーを外して素顔を晒し、髪型はポニーテールのまま。武装は私の名前にもなっているAK—15は手元になく、サイドアームであるPL—15とナイフを携行。左手は、変わらず吊り下げたまま。

そして何故か、女性士官用の制服を着せられています。

何故人形である自分にこのようなものが支給されたのかを聞いてみたところ、その方が色々と都合がつくから便利だ、とか。

確かに便利かもしれませんが。最初から人形であると見られるより、知らぬ第三者からは人間と見られている方が、私自身も身動きが取りやすい。

しかし、いくらなんでも誘惑が多すぎて、AK-15は今とても困っています。

あの若者も、中年も、老人も、声を掛けてくる者たちが皆、どれもとても魅力的。つい、ふらふらと誘われてしまいそうになるのです。大量の人間が居るのだから、一人くらいならつまんでも良いのではと思ってしまうのです。

誘われるように近付いて、世間話で盛り上げたところで、そのままサクツとひとひねり——なんて、そんなことをしたら即刻廃棄処分になるのは間違い無いのでやりませんが。

人間なら罪を言い渡されるだけで済みますが、人形ではそうもいきません。

人間が人間を殺すのと、人形が人間を殺すのは、大きく勝手が違うので。まあ、相手がテロリストの現行犯なら大目に見てもらえるかもしれませんが。

皆様どうも、AK-15です。

過度な誘惑行き交う市街地へと送り出された私は、こうして見ると第三次世界大戦直後に比べればかなりマシだと言える。叶うことならしばらく街を見て回り、今の世界の情勢や市場がどうなってるかを把握したいのだが、今日はお仕事でここに来ているのでそれに費やせる時間はない。

少なくとも、AK—15という人形は職業意識旺盛であり、創造主たる人間にとつて非常に好評な人形なのですから。

さて、そんな私の向かう先は、この街の中心部に位置する鉄道の駅。

主任殿より貰った情報によれば、サブリナは列車を利用して輸送されるこのことで、私は小隊長として、支給される物品の受け取りに向かわなくてはならないらしい。

正直に言えば、人形には自分で移動させても良いだろうとも思っている。地図さえ与えれば戦術人形が道に迷うような事はないのだから、場所を教えて歩いて歩いて来させれば良いのでは——と。至極真つ当な理論であるし、私もそう思うのだが、どうやら私も私で行かねばならない理由があるらしい。

私を送り出した主任^{MAD}曰く——

『喜び給え、AK—15。君のための新装備が届く。その受領手続きをしいつてもらう。なに、難しいことではない。現地のスタッフに従い、装備に君の所有認証を掛けるだけでよいのだ。胎児にも出来るような仕事だ。ついでに補給物資を受け取り、新入りの人形を迎えに行くことなど、造作もなからう』

とかなんとか。詳細情報は機密だとかで共有は行われていないのだが、装備の受け取りに関するものということだけは解る。

どんな装備かは知らないが、私に負担のかからないものであつてほしい。最低限、そ

こは考慮していただきたいものだ。

「ま、私からすれば、新装備より戦力が増えることのほうがありがたいんだけど……」

それだけに、今回追加の人形が配備されるというのは素直に嬉しいことだ。優秀な盾役であることを心から祈っている。

「それにしても、随分と変わったもので……」

祈りながら歩きつつ、私の時代とは変わった景色に郷愁が湧き上がる。

建ち並ぶ建築物は、どれもが記憶にあるものより遥かに高い。戦後の復興が進んだ証かと思うのと同時に、それが“俺”の生きていた時代との乖離を感じさせる。

乖離したのは時代だけではない。こうして、警察組織や一般人の目を気にせず出歩けること。街の中を飛び交う電波の類を認識できること。

それらが、変わってしまったのは時代だけでなく、自分もなのだと思慮なく、実感を伴って訴えかけてくる。

試しに深く電波を覗く。街の空を行き交う電波は民間のものから公的機関のものまで様々な形が、スクランブル交差点のように絡み合っている。

「ん……う？」

そんな中に一つ、他とは違う形の波を見つける。波の形や長さが、他とは全く違う。電波の強度的に民間用とは言い難い。私のデータベースには登録されていない形だ。

匂う。それはとても懐かしく、楽しそうな血の匂い。

今すぐ匂いの出処を辿りたい。しかし残念ながら、今はお仕事が優先だ。寄り道をす
るような時間の余裕はない。

それにいくら私でも、おつかいも出来ない人形と思われたくはないのだ。

目録を眺めるといのは、目を疲れさせる仕事だ。やたら文字が小さく、そしてびつ
しりと狭い文書の限られたスペースの中に詰め込んでくる場合が多い。生前にもそう
言った物に触れる機会があったのだが、終わった後はいつも目を揉みたくなっていた。

7. 62mm弾が徹甲仕様1500発、HEI仕様焼夷榴弾が500発。各種手榴弾とナイフ
に12ゲージの散弾多数。その他びつしりと並ぶ周期番号やよくわからない文字の羅
列されているのは、研究用機材や試作品の類だろう。予め主任殿より受け取っていた受
け取りリストと照合し、数の過不足がないかを確認。

軍の人間のやる仕事というのは殊更に正確だ。かつて裏で運び屋を使ったときのよ
うに、余計なものがない。これは幾らか気持ちが良い。

捲りあげたりリストを戻して視線を上げると、向かいに立つ東欧系のガタイの良い男は
しげしげと、此方を観察するように眺めていた。

「目録は確認しましたよ。それで、名前を書けばよろしいので？」

「ああ、頭の書類にサインをしてくれ、それで物資受領に関しては何も問題ない。しかし……まさか本当に人形を寄越すとはな、あの男」

やはり、人形がこういった場に出てくるのは多くないのか。先程からこちらに向けている視線の意味も、恐らくはそれだ。

気にすることは無い。ただ、こういうのは珍しいというだけの話だ。人間に言われた事をこなして以上、人形としての意義に反するものではない。後ろ暗いことだって、何一つとしてないのだから。とはいっても、社交辞令的な意味合いも兼ねて会話を続ける。

「お気に召しませんか」

「いや、そういう訳じゃない。俺達からすれば、書類に名前を書いてくれるんならそれで良い。ペンを持つ手が天然物ネイチャーメイドか工業製品ファクトリーメイドかは、そいつの好き嫌いではないのさ」

担当者の男は毛の薄くなった頭を撫でながら、こともなげに言いはなつ。

そういうものなのだろうか。しかし考えてみれば、そうかもしれない。

鉄道輸送部の彼らからすれば、重要なのは荷物の輸送と担当者への受け渡し。受け取る相手が人形だろうが人間だろうが、預かり知らぬことではない。

書類の上にさらさらとペンを走らせ、自分の名前を記入する。名前を確認、AK—1

5、間違いなし。

「確認願います」

「了解」

書類を渡す。彼は受け取り、確認する。

「ほう……随分と品のある字を書くな」

「そう見えますか？」

「ああ。育ちの良い高級士官の連中を思い出すね。士官タイプの戦術人形ってのはそういう仕様なのか？」

文字のクセ、か。生前の逃走生活中は棒線一本引くのにも気にしてたが、言われるまですっかり忘れていた。

通常の人形にはそういったものはないということか。覚えておこう。

「手に染み付いた癖というやつですよ、きつと」

「相変わらず、技術屋の考える事はよくわからんな。まあいい。これで受け取り手続きは完了、明日にはそっちの施設に届く」

まずは仕事を一つ片付けた。次は装備と戦術人形“サブリナ”の受領手続きだ。それを終わらせて、この場所での仕事はお終いだ。

「次は戦術人形の受け渡しと、機材の認証登録だったか。こっちだついてきてくれ」

担当者の後に続いて、一つの大型コンテナに向かう。彼が備え付けの端末を操作するとコンテナの口が開いて中が顕になる。

中には大きな棺桶を思わせる黒い直方体の箱とガンケース、シールドユニットの装備された外骨格がそれぞれ一つずつ。そしてそれとは反対側の壁に固定された、ガンケースよりわずかに細く、長いケースが一つ。

それぞれの管理端末と無線接続を行い、中身が事前に受け取った情報の通りであることを確かめる。

つまり片方は戦術人形、もう片方は詳細不明と言うわけだ。

「手続きの方法は判るか？」

「マニュアルをインストール済みです」

「便利だな。それじゃあ、終わったら声を掛けてくれ」

「はい。お気遣いどうも」

そう言つて男は立会を終えて別の仕事へと向かつていった。いやはや、実にご苦労なことである。

では、一人になったところで、私も残りのお仕事を終わらせるとしよう。

彼にも言つた通り、戦術人形及び装備の認証登録方法を記したマニュアルは私の電腦の中にインストール済みである。戦術人形というのは本当に便利に出来ていると実感

せざるを得ない。

手順は実に単純だ。まず端末に接続。次に認証キーを通して権限の登録を行い、権限周りのプロテクトを強化。最後に起動コマンドを送信して接続を解除する。

以上で手続き完了。人間がやるには端末と格闘しなくてはならない手順も、戦術人形同士ならあら簡単。電腦内のやり取りですべて完結する。

これで戦術人形と武装の権限登録は完了だ。サブリナの眠る鋼鉄の棺桶の蓋が開く。開かれた棺桶の中に眠る戦術人形は、既に起動シーケンスと内部的な初期処理に移行している。

ご苦労さまでした。実に楽な仕事で、これなら主任が豪語していたように胎児にもできらるだろう。

あとは、正常に起動するかどうかだ。動かなければ適当な貨物として取扱い、我らが主任殿の手で修理されるだけのことである。

余計な手続きをしなくてはならないので、そうならないことを祈る。

「ッ——」

どうやら、私の祈りは届いたらしい。

コンテナの内壁から背を離し、手首や関節の具合の確認をしているサブリナへと話しかける。

「身体の調子はどうか、サブリーナ」

声をかけられたサブリーナは、瞬きをしない真紅の瞳でこちらを凝視する。

私も見つめ返すついでに外観データから解析を試みる。色素の薄い肌、白に近い色の髪、瞳の色彩。事前に写真で把握していたが、彼女の容貌はアルビノに近い。

しかし、内骨格についてはかなり頑強だろう。それに合わせて出力もかなり高いと見て取れる。紛うことなき軍用規格の戦術人形、及第点以上と言えよう。

優秀な戦力を回してくれた上層部には感謝の言葉を送りたい。

「——問題ありません、AK—15」

「結構」

そして、登録手続きにも異常はなかったらしい。私を正しく認識しているサブリーナはケースから立ち上がる、軍式の敬礼を行う。

形式的な挨拶。予めインストールされたOSに従っての初期行動。こういった軍人然とした振る舞いをさせる方が、やはり商品としての受けは良いのだろう。

人間と戦術人形であればいざしらす、戦術人形同士にこのようなやり取りは必要なのかと疑問は残るが。

「戦術人形”SPAS—12”、識別名はサブリーナ。これより貴方の指揮下に入ります。どうぞ、盾として御利用ください」

「第31独立遊撃機械化実験小隊、小隊長の”AK-15”。君には、望み通り私の盾になってもらう。よろしく頼む」

答礼。

まあ、如何に不要と思えるやり取りであったとしてもだ、創造主にんげんが望んでやらせてるというのなら付き合ってやることも吝かではない。

やった方が受けが良いと言うのなら、私もそうやって理想的な戦術人形として立ち回るのみ。

そっちの方が、何かと便利に働くものだ。

8話・サプライズ

その日は、いつもと何も変わらない一日だった。

昨日のように明日が続いていくため、間をつなぐ今日という時間なのだろう。いつものように今が過ぎていくから、きっと明日も何も無い。

日常というのは、そういうもののことを言うのだろうと私は思っていた。

「アウラー！」

「ナターシャ、こっちこっちー！」

自分を呼ぶ声に応え、急いで駆け寄ってくる友人——ナターシャに、大きく手を振って居場所を示す。

人の群れの中を縫うように進んできたナターシャは、私の前につく頃にはすっかり息が上がっていた。

「お待たせ、待たせた？」

「大丈夫。時間通りだよ、ナターシャ」

「よかったあ……」

息を切らし、頬に汗の筋を流しながら、大げさに安堵する友人の仕草についつい笑っ

てしまう。

「わ、笑わなくなつて良いでしょ？」

「ごめんごめん、何かおかしくつて……」

ナターシャはむう、とわかりやすく頬をふくらませた。そんな表情をするから、ついつい此方も笑つてしまうのだが、彼女はきつと、そんな事実には気付いていないのだろう。

「それで、何処に行く？」

「んーつと……まずは服を買いに行こう？それからご飯とか食べに行つて、それから――」

指を折つて一つずつ、やりたいことを並べ始めるナターシャの言葉を聞きながら、タイムスケジュールを組み立てる。

ナターシャの事だから買い物時間は長めになるだろうと推測して、少し遅めの昼食になることを考慮し、近場でやっている店のリストを記憶の中から呼び起こす。

傍らでこれからどうするかを語るナターシャをよそに、行動計画を策定。

というか、この友人、どこかでストップをかけなければタイムスケジュール的に不可能な願望まで喋りそうな勢いだ。

「わかつた、わかつた。まずは小物から買いに行こう？それからお昼を食べて、そのあと服を買いに行こうよ、ナターシャ」

「うんつ、アウラが言うならそうしようかな。ね、早く行こう?」

陽性の笑みを咲かせてナターシヤが私の手を取る。

他の友人はナターシヤを押しが強いか、やかましいと言う。私もそう思う。

しかし、一緒に居れば忘れてしまう程度でしかない。だから、私は彼女達と違ってナターシヤの友人なのだろう。

「あ、戦術人形だ」

暫く歩いていると、隣のナターシヤがそう言った。視線を追えば、彼女の言ったとおりに個性的な服装に身を包む少女達がそこにいた。

「よく戦術人形ってわかったね」

「ダミーを連れて歩くのは戦術人形だからね。それにほら、皆ガンケースもってるから」
「ふーん、なるほどね……流石アウラ、詳しいね?」

正直に言えば、遠目からではそれが戦術人形かの見分けをつけられなかった。私はナターシヤほど詳しくないから、彼女が言うならそうなのだろう、と。

いつものやり取りだった。

自律人形に詳しくない私がナターシヤを褒めて、ナターシヤが得意げに説明する。それを私が程々に聞く。

だけど、今日は違っていた。私が褒めても、ナターシヤはいつになく真剣な表情を浮

かべたまま、あちらこちらに視線を飛ばしている。まるで何かを探しているようだった。

「どうしたの?」

違和感を覚え、呼び掛ける。声で私の存在を思い出したか、ナターシャは振り向いて手を握ってきた。

彼女の細い指が手首に食い込む。いつもより、力が籠もっている。瞳は不安に揺れているが、私のことを縋るように捉えている。

初めて見るナターシャの怯えた表情。私は困惑していた。

「ナターシャ?」

「アウラ、ここから離れよう?」

「どうしたの?」

何故?彼女の言葉の理由がわからなかった。

きつと呆然とした表情を浮かべてる私に、ナターシャは焦りをにじませながら顔を近づける。そして、私にだけ聞こえるように静かな声音で主張する。

「だって、武装した戦術人形の部隊がいるなんて、普通じゃない……っ」

私がナターシャの言葉の意味を理解できたのは、付近の乗用車が爆発と共に火柱を立ててからだった。

全ては計画通り。

爆破を見届けた男はそう考えていた。

のうのうと平穩を享受し、安寧に浸りながら生きている連中が大勢吹き飛んだのだろう。結構な事だ。

大国の身勝手さと、そこに住まう愚かな者共により振り回され、全てを奪われた者達も居る。だというのに、それを忘れたように惚けた顔で生を貪る連中など、生きている価値も無い。

大戦で我々が何を失ったのか。その後の環境の崩壊で、犠牲となったのか誰なのか。奴らは考えようとしめない。

その時、男の胸ポケットの端末が震え、着信を告げる。

男は無造作にそれを手に取り、応答ボタンを押して受話器を耳に押し付ける。

「……ああ、あんたの言った通りにしたよ」

相手の言葉を聞き届け、不機嫌そうに眉をひそめながらも男は語る。

「お陰で、PMCの人形共も木端微塵だ。邪魔を出来る連中はもう居ない」

男にとって、事態はうまく運んでいた。寧ろ、上手く行き過ぎて不気味なほどですら

あつた。

「分かつてる。心配するな、あんたから貰ったデータに従う」

それは、この電話の向こうにいる者のアドバースに従った結果だ。

戦術人形の行動パターン、治安維持を行うPMCの動き方。それらを知悉する何者か。それだけの知識を持ちながら正体は不明であるという得体の知れなさはあつたが、その持つ知識は男が特に必要とするものだった。

「ああ、ああ、忘れちゃいけないさ。増援が来るまでに片付ける。それで良いんだろう？」

悪魔か、それとも天使か。男からすれば、どちらでも良い事だった。

彼にとつて重要なのは報復、ただそれだけ。

通話を終えた彼は、通信端末を操作して別の番号へと発信を行う。

「自分達の生活が何を犠牲に成り立っているのかを考えようともしない、恥知らず共。俺がお前達に痛みというものを教えてやる」

男の瞳がギラつくのと時を同じくして、幾つもの銃声が響き始めていた。

爆音とともに炎が生まれた。

続いて無数の悲鳴が上がった。

平和だった市街地は、いまや魔女の窯の底と化している。

実に忌まわしい行いだと言わざるを得ない。

誠に痛ましい事件と評せざるを得ない。

故に、度し難い行いだと断罪し、下手人へと怒りの鉄槌を下さねばなりません。

民間人を守護するという大義名分は、人形が殺人を犯す事さえ正義として許容するの
ですから。

皆様ごきげんよう、AK-15です。

急ぎ、状況から報告させていただくと、爆破テロが発生した。

時刻は人の多い昼下がり。複数地点で同時に起爆した爆薬により、メインストリート
で日常に浸る数多の民間人が吹き飛んだ。

爆発が起きる直前、駅へと向かう間も感じ取っていたあの電波が一際強くなった。そ
して、それは今も感じ取ることができている。事件との因果関係は不明だが、少なくとも
も無関係ではないだろう。

さて、それよりも重要なのは、この事態が単なる爆破に留まっていないことだ。
どうやら、爆破されたメインストリートでは、今は銃撃戦が行われているらしい。

少し離れた位置にいる私の耳にも届く発砲音は、無秩序に乱射すると思われるパ
ターンを持つ集団と、不均一で控えめな銃撃を行う集団の二つがある。

どちらがテロリスト側か。難を逃れた、あるいは負傷した民間人が多数残っていると想定される状況で銃を乱射をするような馬鹿は、治安部隊にもいないだろう。

「AK—15、これはいったい……」

「テロリズムだよ、サブリーナ」

未だ電腦の処理が追いついてないのか、無機質な表情に困惑した気配を交えているサブリーナの問いかけに答える。

これは、テロだ。何が目的かは知らないが、民間人を爆破するだけでなく、更に銃撃まで加えているかなり過激なタイプと見える。

既に私達の周りには、少しでも現場から離れようとしている民間人の濁流が生まれている。

「私達はどうすれば?」

「行動する」

こんな状況だ。座して待つなどありえない話で、是非も無く行動はしなくてはならない。その上で我々が考えるべきなのは、いつ、どのように行動するかだ。

「命令を求めるのが優先では……?」

「いいや、それでは遅い」

命令を求めろべきではというサブリーナの考えは、マニュアル的には正しい。緊急事態

に伴い、人間に命令を求めるといふのは戦術人形として満点の対応だろう。

しかし、だ。人間が戦術人形に求める姿としては、不合格だ。

人間は、こういう時にこそ人形が助けに行くべきだと言う筈だ。人間の為に行動する人形と、その電脳こそを、素晴らしいと讃えるだろう。

逆に言えば、人間の危機に対して動けない人形など存在として不適合、不要なのだと言われかねない。

故、動くのならば即座に動くべきであると、私は思考する。

それに、これは願ってもない好機なのだ。実利と保身を実現し、そして私の欲求を満たせる可能性まである。一石三鳥な絶好の機会。

行動は早ければ早いほど良い。銃撃戦をしているということは、双方の戦力が存在しているということだ。テロリスト側が増援おかわりを用意してるなどとは思えない。

時間が経てばテロリストは鎮圧されるだろう。

それ故に、私が何人殺せるかというのは、スピード勝負なのだ。

「司令部に伺いを立てて、我々を指揮系統に組み込み、命令を下す。時間がかかり過ぎる。それを待つ間に、貴重な人命が喪われる」

私の言葉に、サブリナは沈黙を返す。電脳の中で考え込んでいるのだろう。しかし私は答えを待つつもりはない。先程も言ったように、これはスピード勝負なのだから。

多少強権的になるが、やむを得まい。

「サブリナ、私は君の上位権限を有している」

「その通りですが、AK—15」

こちらの意図を理解したのか、サブリナの目が少しだけ見開かれている。

私は正解だと彼女に告げるべく、上位権限者としてサブリナへの命令を下す。

「やるぞ、サブリナ。民間人保護のため、我が隊は偶発的に遭遇した戦闘への介入行動を取る」

「——了解しました、隊長」

その命令を与えられたサブリナは、二つ返事で受領する。手にしていた荷物の荷解きを行い、私の後ろで急ぎ武装を開始する。

なんとという幸運なのだろうか、私は自らの境遇に想いを馳せる。

一度は失った命を再び手にしただけでなく、このような好機に恵まれるなど、普通では考えられない。

戦術人形という不自由な身体に墮とされたとき、しばらくは欲求不満を解消出来ないときさえ覚悟していた。

だが、実際はどうか。こんなにも早く、望んだ機会が巡ってくるとは。

今この瞬間、世界の全てへの感謝で胸がいつぱいだった。あとはこの溢れんばかりの

喜びを解き放つだけ。

「次の命令を、願います」

その声に振り向けば、ボディアーマーに身を包んだサブリナがショットガンを携え、私の命令を待っている。

堅牢なボディアーマーと稼働型シールド、防御機構を多数兼ね備えたその立ち姿に、頼もしさを実感する。個人携行火器程度であれば、彼女は難なく耐えきるだろう。

「行動開始だ。一つたりとて、くれてやる命はないということを教えてやろう」

「了解」

私とサブリナは逃げる人々の流れに逆らって、幾つもの黒煙が上がっている現場へと向かう。

これは戦術人形と化した私に許される数少ない快楽。有効かつ最大限に使わなければならぬし、立ち回りには気を使わねばならない。

だがそれでも、ほんの少し楽しんだところで、誰も咎めはしないだろう。

「つう——何が、起きて……つ」

身体が重い。素直に動かない。

最後に覚えているのは凄まじい音で、そして熱と同時に襲いかかってくる衝撃。記憶はそこで途絶えていて、自分は気を失っていたのだと理解する。

そこで何が起こったのかを思い出そうとして、自分に覆いかぶさってくる友人の姿が蘇る。

「そう、だ……ナターシャ……っ！」

未だに頭は上手く回らず、身体も泥のように重い。爆発でやられたのか、音もろくに聞こえないし、視界もぼやけている。そんな状態でも、ナターシャか爆発から守ってくれたのだと言うことは理解できた。

彼女のことを探さなければならない。拒む身体に鞭を打ち、震える両腕で支えながら上半身を起こそうとする。

しかし、一際大きい破片についた手がずるりと滑り、支えを失った上半身を打ち付けてしまう。

その痛みで一瞬意識を失いかけるが、体の内側で反響するように残り続けている別の痛みが、意識を繋ぎ止めていた。

起きなければ。起きてナターシャを探して、此処から逃げなければ――

「っう……っ！」

どうにか起き上がろうとして地面に手をつくが、また滑ってしまふ。姿勢を保てない

身体は重力に引つ張ばられ、地面へと強かに叩き付けられる。

なぜ、どうして、こんなに滑るのか。掌は確かに傷ついているが、感覚はある。ならば地面に原因があるのではないか——そんな思いで地面へと目を向ける。

そして、そこに広がる光景を目の当たりにして、私は言葉を失った。

「あ……………つあ……………」

赤い。赤一面の大地がそこには広がっている。

ただ一色に染めあげている染料の源泉が何なのか、否応もなく理解させられる。

「あ……………、ああ……………?」

私の目の前で、力なく横たわっている友人の身体から、血が流れ出ていた。

「ナタ……………シャ……………ナターシャ……………つ!!」

這って身体を引きずりながら近付いて、ナターシャの身体に触れて呼びかける。しかし、答えてくれる気配はない。目を閉じたまま、ピクリとも動かない友人に必死に呼びかけ続ける。

しかし、どうしようもできない無力感だけか広がっていく。

「つ……………た、助けて……………つ私の、友達……………!」

視界の隅に入り込んだ人影にも、なりふり構わず助けを求めた。

その人影はこちらを認めたのか、まっすぐ向かってくる。

助けが来たのだ。そう安堵したのは僅かな間で、近づいてくる影の輪郭がはつきりしてくるにつれ、人間から大きく外れた姿をしているのがわかってくる。

2メートルほどの身体の材質は鋼鉄。各部は生命的な気配のない角ばったパーツで構成され、赤く光る単眼を頭部の中心に備えている。

「戦術、人形……？」

形状には見覚えがあつた。ナターシャが読んでいた雑誌に載っていたのを、見たことがある。

古いタイプの軍の戦術人形で、確か既に退役が決まっているモデルだと、ナターシャは語っていた。

何故、こんな場所に旧式の軍の人形がいるのか。

軍の人形が何故、自分に銃口を向けているのか。

ようやく機能を取り戻し始めていた私の耳が、周囲で起こる幾つもの発砲音と悲鳴を拾い上げたことで、その答えへと思いついた。

何故かは知らないが、この旧式の軍用人形は暴走している。周囲ではこれと同じ人形による虐殺が行われているのだ——と。

焦点を合わせるかのように、目の前の戦術人形はカメラのレンズを収縮させた。ほんの少し、銃口の向きが上にずれる。

銃の経験なんて微塵もないが、直感的に、頭部を狙っているのだと理解できた。相手は機械だ。さぞ狙いは正確なのだろう。

どうやったって逃げられない。一般人でしかない自分には振り下ろされる暴力に抗う術はない。

だから、自分の背後から飛び出してきた何かが目の中の戦術人形に襲い掛かっても、見ている事しかできなかつたのだ。

9話・IMMUNITY

突然ですが、当てが外れたという経験はあるでしょうか。

そう例えるならば、辛くて美味しいと聞いた店に行つたが肝心の料理が甘口であったような。逆に辛くないと言われて行つてみたら、実はとても辛かったりとか。

確かにどれくらい辛いのか、というのは話を聞いた自分が勝手に想像したことなので誰も咎められるものではない。しかしながら、期待が外れたという感情だけはどうしてもなく残つてしまう。

今の自分の気持ちというのが、正しくそれなのです。

皆様ごきげんよう、AK-15でございます。

挨拶をしましたでしたが実は今取り込み中でして、負傷した民間人を襲う戦術人形の身体に飛び掛かりながら挨拶する事を、まずは赦していただきたい。すぐにでも片付けるので、しばしお待ちを。

両脚で挟んで頭部を固定。身体を振り子のように、反動をつけて動かしながら挟んだ頭部を捻って、頸部から一気に振り切る。ぐらりと、一瞬の浮遊感を感じると同時に、標的の躯体を民間人とは反対方向に蹴って飛び降りる。

頭部の制御ユニットを失った戦術人形は容易く倒れ、物言わぬスクラップが出来上がる。

倒れた人形の姿には、見覚えがあった。

「旧型の戦術人形、しかも軍採用モデルだと?」

かつて軍にも採用されていた純粋なタイプの戦術人形の、現行モデルより古い型。仮想空間内で散々と標的に使わせてもらったのは記憶に新しい。

テロリスト共はこういう訳かは知らないが、この戦術人形を運用しているらしい。

「テロリスト共め、こんなものを何処から調達した」

「隊長、民間人の保護が完了しました」

「保護したのは私だろう」

急行した私に追いついたサブリナが報告をしてくる。民間人保護とは結構な報告だが、一つだけ訂正を挟む。手柄を誇るわけではないが、危険を排除したのは私なのだ。

「安全確保まで含めての保護かと」

「二理ある。御苦労様、サブリナ」

よくよく見れば、先程までそばにいた民間人は、展開型の防弾シールドの裏側に運ばれている。物陰に近く、目立たない場所だ。

メインストーリーに展開している敵戦術人形は旧式で、単純な命令を実行するタイプ

とデータベースには記載がある。彼女らもシールドの裏に隠れてじつとしていれば、恐らく難は逃れる事だろう。

私はシールドの端から顔を覗かせてこちらを見ている民間人に微笑みかける。そして手を振りながら、ハンドサインを使って裏側に隠れているようにと合図する。

察しが良いのか、すぐに顔を引つ込めてくれたので、まずは一安心だ。

「さて、この状況をどう処理する？」

意識は前方へ。眼前の状況に考えるのは、これをどうこなしていくか。

「一機を破壊したことはあちらにも伝わっているはずだ。此方を排除しにくる可能性は？」

転がるスクラップを一瞥したサブリナは、一つの可能性を私に提示する。

連中のお楽しみタイムを邪魔する輩——つまり私達のことなのだが——を、排除しにかかる可能性はあるか、と。

可能性としてはゼロではないし、一つの定石でもある。だが、私はそれ以外の可能性を考慮する。

「連中の目的は、あくまでも民間人の虐殺だ。此方に戦力を回したとしても極一部。我々が待つ間に、残った兵力が民間人を殺して回る」

「では、私達は……」

「我々は積極的攻勢に出なければならぬ。言ってしまえば、免疫細胞の真似事だよ。病原菌は駆除して回らねば」

解釈による誤解を挟むことのないよう、断言する。

サブリナの口元が強めに結ばれる。察しの良い部下を持てたことは、私にとつても幸運の一つだと言えるだろう。

「よろしいのですか？ 戦闘を激化させることは、かえって危険なのは」

サブリナの言わんとしていることは理解できる。

攻勢に出るのは通常、戦力的優位に立っている側だ。

では、我々はどうか。

個々の戦闘力では優っている。しかし、状況及び数的には遥かに劣勢。凶上演習的結論で言えば、不利に立つ側だと私の電脳は伝えてくる。

無論、そんな事は織り込み済みだ。それでも行動したのは、連中には明確なタイムリミットが存在しているからだ。

連中に増援は無いが、此方にはある。つまり、PMCの増援がやってくるまでの間だけ戦っていればいい。

まずは交戦しつつ民間人を保護。無理をしない範囲で最大限を目安に、安全を確保する。

「だからこそ、だ。リスクは否定しないが、初志貫徹程度はすべきだろう」

私とて、下手なりスクなんてもの背負いたくもない。しかし、民間人保護を名目として、現場判断での独自行動をしている以上は、それを果たす程度の事をしなくては正当性の主張など夢のまた夢。

要するに、今の我々にはやるしかないのだ。

せめて半分でも人間が居てくれたらという思いはある。

人間相手ならば、対戦術人形戦闘のように純粋な力勝負はしなくてもよいし、何より心の持ち様が違う。

だが、この戦場での人間は、殺されそうになつて民間人しか見当たらない。なんと残酷で悲しいことなのか、頭を抱えて蹲りたくなる。

この戦場は私が期待していた対人戦闘ではなく、対人形戦闘しかないのだ。

もう一度言う、対人戦闘は、無い。なんとも味気ない話である。

失礼、これは失言でした。

私は人間の為に働く人形。対人戦闘については本意ではないのだ。だが、可能性の存在している事も認識し、已む無しと判断した上で介入したというだけのこと。やらざるを得ないという選択を了解した上で、この場所にやって来たに過ぎないのだ。

つまり、最優先事項は民間人保護である。ステークで例えるならば、民間人保護がス

ステーキ肉で、対人戦闘はあくまでもステーキソース。

これから私は、程よく焼けたソースのないステーキ肉にかぶりつくというわけだ。うん、やっぱり味気ない。

しかし、これ以上無いものねだりをするのも不毛である。なによりモチベーションへの影響が無視できない。

ここは一旦忘れよう。そうしよう。

「隊長？」

「いいや、気にしなくていい」

怪訝そうなサブリナからの視線を手で払い、銃声の発生源へ意識を向けさせる。

「幸いにも、連中のシグナルは独特だ。感知は容易い」

敵の人形達を使うシグナルのパターンは、私が街に出たときから感じ続けていたそれに合致している。爆発の直前に一際大きくなったのは、恐らく起動信号か何かだったのだろう。

もう少し意識を傾けていれば、発信位置の特定くらいはできたかもしれないのが悔やまれる。

発信したのが人間であり、破壊が目的なら既に逃亡しているだろう。少なくとも、私ならそうする。だとすれば、この状況は逃げる為の陽動か時間稼ぎか、その両方か。

「近場から処理するぞ、サブリナ」

腹立たしい限りだが、やはり悔やんでも仕方がないのだ。

やれる事をやる、切れる手札はそれ一枚。

「だがその前に、打てる手は……」

「どうしました?」

打てる手は打つべきと言いかけて途中で切った私へと、サブリナは訝しげな視線を向けてくる。だが、私の心にそれを気にする暇はなかった。何故なら、先程否定したばかりの可能性が、未だ僅かに存在していることに気づいたからだ。その予想が正しければ、これ以上無い幸運である。

「……隊長?」

「喜ぶべき事態だ、サブリナ。どうやら天は私達に味方してくれるらしい」

繰り返された呼ぶ声に、喜び過ぎたと自省し冷静を繕って言葉を返す。

未だ理解出来ない様子でいるサブリナに視線で促し、彼女の意識をメインストリートへと向けさせる。少しして彼女も状況に気づいたらしい。無機質な表情が僅かに揺れ、先ほどよりもほんの少しだけ目が見開かれている。

私達の視線の先、メインストリートの奥からは、旧型戦術人形達がひび割れたアスファルトを踏み砕きながら進軍してきていた。

「戦闘態勢だ、攻撃するぞ!!」

「了解——ッ」

号令を受け戦闘態勢へと移行するサブリーナを横目に、私は一つの回線へと接続する。どうやら、敵は私の予想を裏切ってくれたらしい。だが、行動方針に変わりはない。むしろ先程よりも強い意志で、攻勢に出ると決意した。だからこそ、打てる手は打っておくべきなのである。

その日グリフィン&クルーガーの司令部は、蜂の巣を突いたような慌ただしさだった。伝聞や書類を持った人間のスタッフ達が忙しなく行き来し、怒号のような指令が飛び交っている。

そんな中でも一層の焦りを見せていたのは、この前線司令部にて指揮官職に就く男であった。

「現場の状況及び警備部隊の応答は？」

「テロリスト側の戦術人形により、既に多数の犠牲者が出ている模様」

「警備部隊からのシグナル途絶。恐らくは……」

「ああ、当たり前だ……対人想定装備で軍用人形相手に保つ筈がない」

報告する幕僚の言葉は殆ど絶望的な意味合いを伴っていた。対応可能な部隊は現場

にいないということはつまり、部隊到着までテロリストの虐殺を許容する事にほかならない。

「クソツ！情報部は、欺瞞を掴まされたということか……！」

男は忌々しげに呪詛を吐き出しながら、眼鏡の位置を直す。

情報部から流れてきた「暴動を計画している危険分子あり」という情報に従い、彼は鎮圧用に人形の部隊を市内に紛れさせていた。

元々この街の治安は安定している方だ。大規模な暴動は起こらないだろうという情報部からの想定に従い、軽装備で向かわせた。

問題なく、静寂な日常の内に鎮圧される。それが、大勢の予想だった。

しかし、現実はどうか。予想は裏切られただけではなく、刻一刻と状況は悪化している。

容易ならざる敵と認識を改めなければならなかった。

「現場の映像は出せるか？」

「生き残っている監視カメラからなら。なんとかか……」

管制の一人が答え、コンソールを操作する。格子状に分割されたモニターが、複数箇所から見た街の様子を映し出す。

どれもひどい状況だった。無事な場所なんて、どこを探しても一つとして見つからな

い。

直視することさえ憚られる。そんな惨状を同時に多数目の当たりにしながら、指揮官である男は一つの映像に目を留めた。

「A5の映像を拡大してくれ！全画面で、今すぐに！」

彼はすぐに拡大するように管制へと命令を下し、断続的なコンソール操作の音のあとに、映像が全画面で表示される。

拡大された映像の中では、見たこともない二体の戦術人形が戦っていた。

片方は完全装備の重装型、ショットガンを手に行っているとわかる。もう片方は獣のように跳ね回るせいで目で捕えにくいのが、制服のようなものを身に着けている軽装タイプ。そのどちらとも、見たことがない。

「何処の所属だ？映像解析を急げ、シグナルも再確認だ！」

彼は、この街に配備された全ての人形達を取り仕切る地位に居る。そのため、自社に所属する戦術人形は全て、容姿も実力も彼の頭の中に入っている。

しかし、映像の中を輪郭がぼやけてしまう程の動きを見せる軽装型の戦術人形の服装にはどこか見覚えがあった。

記憶からより正確に情報を引き出すために目を細め、映像を睨みつけた矢先に画面は暗転した。流れ弾の一つがカメラを直撃したのだろう。

拡大して見る事ができたのは僅かな時間ではあったが、充分だった。彼の頭脳は秒刻みで、記憶の中に眠る答えを想起していく。

「この服、この色、見覚えがある……ッ、まさか!？」

そして、ついに答えへ至るとほぼ同じタイミシングでオペレーターが声を上げる。そこには動揺と、切迫した感情が込められていた。

「シグナル識別完了。これは……正規軍の戦術人形です!!」

告げられた報せは、この場の誰もが望まないものだった。

10話. PUNISHER

部隊で戦う状況において、定石というものが幾つかある。

まずは、明確な目標を設定すること。これにより部隊を効率的に機能させる方針を立てることができる。

次に、周囲の環境の状況や敵の情報を把握すること。これにより敵に対する有効な手段を構築することができる。

そして、視界を適切に確保すること。これにより流動的に変化する状況を素早く把握し適切な判断を下すことができる。

最後に、敵の嫌がる事をやること。これにより敵の目的を挫くことができる。

——新ソ連陸軍士官教範より抜粋

「よし、行つたな……」

自分たちから離れていく自律人形達の背中を見送りながら、一人の男がつぶやく。

背後を振り返れば、其処には何人かの人間が息を潜めて隠れていた。彼らはこのストリートで起こった襲撃から辛うじて生き残った生存者達だった。あくまでも現時点で、

ではあるが。

彼らに自律人形達が去ったことを告げると、僅かながらに安堵が広がっていくのが見えた。

「でも、どうして急に移動したんだ？しかも全部一斉にだなんて」

直面した危機が去ったことで他に気持ちを回すことができる余裕が生まれたのか、一人が疑問を口にした。

「さっきまでは此処をずっと周回していて、場所を変える気配なんて無かったのに」

生存者たちは皆一様に考え込んだ。暫くして、先程とは別の一人が口を開く。

「そうしなければいけない状況になった……とか。治安部隊が到着して、人手が足りなくなつたなら……」

「俺たちは助かるのか！」

一人、また一人と固く閉ざしていた口を開き始める。助かるのかもしれないという希望が、生存者達の緊張を和らげ始めていた。

「だったら移動するべきじゃないのか？ここも戦場になるかもしれない」

「移動するなんて無理だ！俺は足を怪我しているんだぞ？」

気づけば、生存者たちのなかで口論が起こり始めていた。主張は大まかに分けて二つ。安全そうなのうちに此処から出て屋内に移るか、ここでじっとして隠れているか

のどちらかだ。

「そうじゃなくたって、銃弾が飛んでくる場所に出るなんてお断りだね!」

「だから今、移動するんだろう?あのマシン達もない、銃声もしない今なら安全なはずだ!」

「外が安全だと?あんたが保証してくれるのか?安全な筈のストリートを歩いていて脚を撃たれた、この俺に?」

男は生存者達の言い争いを酷くどうでもいい気持ちで聞いていた。

生存者達の論争がどう決着するかは僅かにも興味がわかかなかった。移動するにしろ、留まるにしろ、彼にとつてはどちらでも良かったからだ。

気づけば、生存者たちの意見は綺麗に二分されていた。

「あなたはどこう思うの?」

そして一人の生存者が彼に問う。答える気もないくだらない質問ではあったが、敢えて口にするのであれば、答えはすでに決まっていた。

「貴様ら全員、此处で死んでもらう」

「えっ?」

男は懐に隠し持っていたモノを抜き放つ。

それは自動式の拳銃だった。そして彼は、自分に問い掛けてきた生存者へと銃口を向

ける。

何を向けられているのかも理解出来ず、口を半開きにした間抜けな面で唾然としたままの人間たち。これから殺されようとしているこもすら理解できないような連中。

そんな奴らの為に自分はずべてを奪われたのか。

男の腹の奥底から、煮え滾るような怒りが溢れ出る。

「我らが祖国に、再びの夜明けがあらん事を」

せめてその命で償えと、祖国と天に召された同胞への祈りを捧げながら、引き金に掛けた指に力を込めた。

銃声の一つ、鳴り響く。

しかし、生存者たちの数は一人として減っていない。その代わりに、男の手に握られていた拳銃が弾き飛ばされていた。

確りと持っていたはずの拳銃を弾くほどの衝撃に、利き手を抑えながら振り向いた男が見たものは硝煙を立ち上らせる銃口を構えた一つの人影。

「皆様ごきげんよう。此方、市民の頼れる味方、軍所属の戦術人形“AK—15”でございます」

銀の長髪、青の瞳。正規軍の制服に身を包んだ戦術人形——AK—15が其処に居た。

サブリナは戦っていた。敵の自律人形が仕掛けてくる近接をシールドで受け止め、そして力任せに押し返す。

敵の旧式のボディが、現行仕様の彼女に敵う道理はなく。それだけで大きくのけぞり、ウィークポイントである装甲と装甲の隙間を晒した。当然、それを見逃すはずもなければSPAS—12の放つ12ゲージが内蔵するベアリングが配線と基盤を食い荒らす。

機能を停止して倒れようとする旧式戦術人形、サブリナはシールドの先端を開いてそのボディを掴み、別方向から銃撃を加えようとしていた他の敵へと向かって放り投げる。

今まさに射撃体勢に入っていた人形たちは盛大なクラッシュに巻き込まれ、一時的にエラーを起こす。それに飛びかかったサブリナは、クローの様に展開したシールドの先端で、その人形の胴をねじ切る。力を失った旧型達を放り捨て、彼女は無表情のまま排莖を行い、次に備える。

「どういふつもりですか、隊長……」

しかし、彼女の内心は穏やかではなかった。それは隊長のAK—15が、サブリナに

与えた命令が原因だった。

——別行動を行う。サブリナは敵をひきつけて囿になれ。

あの隊長は、迷わず自分を囿に使った。そして自分は実行犯のところに行くと言って、何処かへいつてしまったのだ。

まあ、それ自体は一向に構わない。自分であれば強固なボディと出力を活かして多少は無理がきく。囿に使うというのなら、妥当な人選だ。

とはいえ、問題なのは隊長であるAK—15の方だ。彼女は極めて軽装だ。制圧するのは簡単だろうが、独自判断で行動しているからには制限も多い。その状態で果たして無事に乗り切る事ができるのだろうか、と。

「……まずは自分の心配をしておけ、でしたか」

サブリナも、命令を受けた際にそれを訊ねたのだ。しかし、彼女は心配ないという一点張りで、其処についての説明がまったくない。そしてあろうことか、装備においては遥かに整っている自分の心配をしろと言ってきたのだ。

自分のことを棚に上げて何を言っているのか——そこが彼女にとって不満だった。

「なら、そうさせてもらいましめようか……」

サブリナは自らの思考をそこで中断し、次の襲撃に備える。

敵はまだ多い。

あの隊長の自信の出どころは謎だが、しかし自分は命令をこなすだけだ。彼女が言ったとおり、他人の心配をしている暇はない。

サブリナは自分にそう言い聞かせながらフォアエンドを力強く引いて、次の戦闘を開始した。

いやはや、危なかつたと言わざるを得ない。

もし私が間に合わず民間人が撃たれていたら私の立場が危うくなる。”非常事態に巻き込まれた状態での現場判断”という名目で行動してるが、殆ど独断専行のようなものである。私の手の届く位置で民間人に犠牲を出すわけにはいかないというのが、なんとも世知辛い。

「貴様……！」

「両手をあげて、膝を付け」

今回の事件の実行犯と思しき男に、降伏勧告を受け入れる様子は無い。

それどころか、憤怒の形相で此方を睨んでいる。拳銃を向けられているというのに、恐怖を感じている様子はない。

「AK—15と言ったか……機械の分際で、俺の邪魔をするのか……！」

「両手をあげて、膝を付け。これが最後だ」

「貴様らのような人間の道具風情が……撃てよ、撃てないのか？」

繰り返し警告をするが、男は従わない。それどころか此方を挑発してきている。しかし、実を言うと彼の言葉の通りだ。

私に彼を射殺することはできない。

本当ならば今すぐにも射殺したいし、それが最も容易い解決方法だと理解はしている。しかし、権限がそれを許さない。

幾ら私が軍用人形とはいえ、平時においては“殺害もやむ無しと認められる状況”でなければ私は射殺はできないようになっている。

例えば、彼がナイフを抜いて切りかかって来たとしても、私は両方の膝を撃ち抜いて制圧することができる。

例えば、彼が隠し持っていた銃で民間人を狙おうとしても、それより早く腕を撃ち抜いて制圧することができる。

故に、私の電腦は、“彼を射殺しなくても良い状況”だと判断してしまっている。

だから、私は彼を殺したくても殺せない。

「凶星か……はん、市民の頼れる味方が、笑わせる」

男は、嘲笑うように笑みを浮かべた。今、私が撃てない事を確信した表情だった。

「話をしようじゃないか……お前はどうかやって、俺の居場所を割り出した？」

時間稼ぎのつもりか？まあ、乗ってやろう。今の状況はあまりにも私が有利すぎる。

「この街にはカメラとマイクがどれだけあると思う？」

「さあ、な……」

答えは、無数にある。今この付近でも両手では数え切れないほどだ。

携帯端末などは特にいい、カメラとマイクを備えるだけでなくネットワークにも繋がっている。それら全てにネットワーク回線から侵入してしまえば、私の目と耳はこのストーリーのすべてに行き渡る。

「だが、俺の位置を特定は出来たのは何故だ？」

「貴様が戦術人形にコマンドを送る際のシグナルは独特だった。それを私が覚えていたから、二度目に放たれた時に発信源の位置を特定するのも容易だったというだけの事……パニッシャーを気取ったのが、そもそもの間違いだ」

「なんだと……？俺をパニッシャー気取りと言ったか……？我々の報復を、気取ったものだと言ったのか？」

男の顔から、笑みが消えた。地雷を踏んだか？

「そうだろう？殺すだけが目的ならば、自律人形を分散させて自分は逃げればよかった。だということに貴様はそれをしなかった。自分の手で殺す事にこだわった。貴様の本音

は透けて見える。貴様はただ、殺したかっただけなんだ」

ならばこそ、機を逃してはならない。目を凝らして、一挙手一投足を観察しながら彼を殺してもいいシチュエーションを構築する。

「違う、違うぞ、戦術人形！貴様達のような機械仕掛けの脳味噌では理解出来ないだろうが、これは正当な報復だ。私には大義がある、正義がある！この国に無為に踏み躪られ、奪われた我等には貴様らから奪い返す権利がある！」

血走った目をかっぴろげ、口角泡を飛ばす様相は実に見ていて素晴らしい。見ていて清々しい迄に気取っている。

殴られたから、そいつの事を殴り返してもいい。とても古典的で王道で素晴らしいまでの自己欺瞞だ。

本当は、ただ殺したいだけなのに。精一杯その殺意を虚飾で飾り立てている。正当な権利のある殺しだから良いと言って、自分と周囲に訴えかけている。

きつとこの男も本当は善良な人間で、当たり前の幸福の中に生きていたのだろう。

ああ、私の好きなタイプだ。初めてこの男を好きになれたかもしれない。

私はお前の殺意と動機を肯定する。だから、お前を同じ理由で殺したって文句はないだろう？

「であれば、貴様も奪い返されるべきだ。その覚悟はあるのだろうか？」

「ふざけるな！ 貴様のような人形風情が何を！」

「そのとおり。私は人形、人間の理屈で動けるはずもない。だが……」
だが、と言つて私は彼の後方へと視線を向ける。

そこには怯えと困惑の混じつた表情で、不安に満ちた目で此方を見る市民たちがいる。そして彼らは全員が、人間だ。

確かに私は人形で様々な権限に縛られている。しかし、彼等が望み許可するのなら、人形である私は動ける。動くべきだ。

「どうでしょうか、市民の皆様。彼は殺すべきだと思いませんか？」

男に拳銃は向けたまま、意識も外すことはないまま市民達に問う。

戦術人形の身体は便利なもので、目を向けていなくても視界の中の映像なら電腦が全て綺麗に処理してくれる。私が問うと、男が一瞬、身体を震わせたのが見えた。

突然矛先を向けられて困惑しているのだろう。民間人たちは皆、右に左にと顔を見合わせている。

「彼は我らの国家が、奪つたから奪い返したのだと言っています。そしてそれが当然の権利であると。ならば同様の権利が、皆様にもあるはずですよ。私は軍の戦術人形であり、同時に国家の民である皆様が保有する武力なのです。皆様の盾であると同時に、剣でもあるのです。故に、皆様がこの男を殺せと仰るのであれば、皆様が望むとおりに殺

害しましょう」

話すうちに皆の視線は少しずつ、私に向けられてきた。

「でも、そうだよな……こいつは俺たちを殺そうとしたんだから……」

一人が、彼への恐怖を口にした。

「そうよ……こいつのせいで、私の友達がつ！」

一人が、彼への憎悪を口にした。

「こいつがこんな事を引き起こしたからっ！お前がそんな事をしたのがいけないんだ……！」

一人が、彼を殺されて当然だと言った。

「そ、そうだ……殺せ……っ」

「お願いだから、そんなやつ殺してよ……！」

やがて、皆が口を揃えて殺せと叫び始めた。

”神がそれを望まれる Deus lo Vult” という言葉がある。

はるか昔、神の名のもとにあらゆる暴虐を尽くした時代があった。神の名のもとに全てが赦される時代があった。

人間が神の言葉を絶対であると叫ぶなら、人形にとつても人間の言葉は絶対であるべきだろう。

「リョーかい
D a — c」

故に、殺す。

私は彼に恨みは無い。民間人で盛大に花火大会を催したことも、正直に言えばどうでもいい。私はただ殺したいだけではあるが、皆が殺していいと言った。

既に殺人許可は下されている。だから、殺せる。

「待て……俺を殺したら、解らなくなるぞ……俺がどうしてこんなことを起こせたのか、調べたいだろう？知りたはずだ！なあ!」

「私ではなく、あちらの皆様には言えよ。もしかしたら気持ちを変えてくれるかもしれない。私の殺人許可を、取り下げてくれるかもしれない」

男の振り向く先には彼を殺せと叫ぶ人間たちがいる。血走った目で、口角泡を飛ばす様相で彼が殺される事を只管に望む人間たちがいる。

「つひ、い……つ!」

それを見た男は情けなく、怯えきった声をあげる。

「待て、知っている事は言う……!言うから待ってくれ!俺を殺すな!殺さないでくれ!」

「重ねて言うが、貴様に恨みはない。しかし、これも人形のやるべきことであるというのなら仕方無いだろう?」

笑つてはならない、楽しんでいると見せてはならない。あくまでも職業的に、肅々と人形として殺すのだと皆様に見せなければならぬ。

撃鉄は既に起きています。あとは撃鉄が落ちるだけで彼を殺す事ができます。じわりじわりと、指先に力が込められるたびに引き金が絞られていく。

「ほうら、言うのなら早く言いたまえ。そうしたら気が変わるかもしれないと言つたらう？」

願わくば言わないで欲しい。言つてしまつたら彼を生かさなくてはならない理由ができる。あと少し、あと少しで撃鉄が落ちる——

「G & K 治安部隊です！武器を捨ててください！」

——だが、無情にもその直前で、空気を切り裂くような甲高い叫び声が制止の意図を以て割り込んできた。

声を聞いて、咄嗟に引き金へとかけていた指を外す。同時に路地裏へと雪崩込んでくる重武装の、しかし民生品の戦術人形たち。

一体が指示を出すと彼女らは、私と市民と実行犯の男のそれぞれを取り囲んでいくよう動いていく。

というか、私の回りを取り囲む戦術人形が一番多い気がするのだが。

私を囲む人形達の一部が割れると、一体の人形が歩み寄ってきた。つい先程まで手際

よく他の人形達に指示を出していた個体だった。

「G & K、治安部隊隊長のXM8だ。ご同行願えるかな?」

「ええ、勿論ですとも。同行しましょう」

こうなつては仕方あるまい。殺せなかつたのは非常に残念だが、今から殺しにかかるのは私の立場が厳しくなる。引き際を見誤つてはならない。

それに、私は人を殺したいとは思つてはいるが、彼を殺したかつたわけではない。拳銃を預けて欲しいという要求にも、勿論、素直に従いますとも。

だが武装解除したというのに警戒は解かれなかつた。気持ちはわかるが、基本無害な私にはやりすぎだと思わなくもない。

そんなこんなでG & Kの戦術人形達に取り囲まれながら、装甲車へと乗り込む。

乗り込んだ装甲車の奥の座席を見れば、サブリナが無表情を保つたまま座つていた。

彼女の無表情からは何を考へてるか分かりにくい、目を合つても逸したりしないから、さほど悪くは思われてない筈だ。

「ご無事でしたか、隊長」

「そつちこそ、サブリナ。損傷は?」

「皆無です」

「よろしい」

隣に座るとあちらから声をかけてきた。

状態を問えば、損傷は皆無だという。彼女は囹としても盾としても、極めて優秀なようだ。それが分かっただけでも、今回の行動は上々の成果だといえる。

並んで座る私達の両脇と対面をがっちり、グリフィン&クルーガーと名乗ったPM Cの戦術人形が固めて、装甲車はゆっくりと走り出した。

それにしても、クルーガーか……嫌なことを思い出す名前だ。

11話. FRIENDLY

薄暗い部屋。白熱電球を向けられた男はその眩しさに目を瞬かせ、鬱陶しそうに顔を背ける。

しかし彼の背後に立つ者——X M 8はそれを許さず、後ろから男の頭を掴んで照明へと無理矢理向けさせる脛を指でこじ開けて、強烈な光を直視させる。

「ぐ、う……………」

目を突き刺すような強さの光と、放たれる熱を目に受け苦悶に呻く男をX M 8は見下ろす。頃くの間、男が逃れられぬように頭を抑えつけ、数十秒——男からすればもっと長く感じただろうが——経ってから、力を緩めて白熱電球から顔を離させる。

「答えろ。お前にあの戦術人形達を渡したのは誰だ？」

「な……………何度も言わせないでくれ……………」

彼女からの問いに、切実な叫び声で男は答える。だが彼の答えはこの部屋の主が満足させ得るものではなかった。光と熱を放つ照明が近づけられ、光を浴びせられた顔の皮膚へとひりつくような痒みが起こり始める。

「俺は、誰があいつらを用意してくれたかなんて知らない！本当だ！」

顔を背けることもできず、かと言って襲いかかってくる熱を緩和する事も出来ない男は、悲鳴のような声音で自らの無知を訴える。

「お前ら何なんだよ！人形のくせに！俺は人間だぞ！人権はどうしたんだよ、クソが！ふざけるな——ツガ、ア……っ！」

この事情聴取が始まってから既に1時間近く経過している。男は限界が来ているのだろう。半狂乱になって絶叫し始めるが、直後、後頭部を掴んだX M 8により、強かに顔を強かに机へと打ち付けられたことで、強制的に黙らせられた。

「鼻が——ッ！」

それで折れたのか鼻面を押さえる男は、机に打ち付けられた反動を殺すことができずに椅子から転げ落ちる。そんな彼を見下ろすX M 8は、その口元に薄く笑みを浮かべる。

「人権だっけ？」

男を見下ろす瞳は酷く無機質で、自分たちと同じ“物”を見下ろすかのようにであった。

「生憎と、この部屋にはそういうものは無くってね」

特大の悲鳴がG & K支社の地下に響き渡った。

「なるほど……つまり、貴方達は偶然現場に居合わせて、民間人を助けに行き、襲われていた民間人を助けるために戦闘を行ったと？」

私から聴取した内容が記載された書類に目を通したG & Kの指揮官が顔を上げて問いかけてくる。

「ええ、そうなりますね」

私はその問を肯定すると、怪訝そうに眉を顰める。私達の言葉を信じてはいないが、否定もできないといった様子である。

しばしそんな表情を浮かべていた指揮官だったが、暫くして苦々しい表情のまま口を開く。

「君達のお陰でテロリストに操られた戦術人形は大方殲滅され、その後の我々の鎮圧も非常にスムーズに進んだ。また、それによって民間人の被害も抑えられ、実行犯も確保できた」

その声音は、表情に変わらず浮かないものであった。

「これらすべて君達のお陰だ。我々としてもその結果を否定するつもりもないし、感謝をしている」

「お褒めに預かり光栄です」

褒められたので返答したら、彼は眉をピクリと跳ねさせて不機嫌そうに目を細める。

まあ、その理由はわかつているのだが。

「とはいえ、だ……この結果を我々はただ偶然と呼んでもいいのだろうか？」

眼鏡のグラス越しに見える彼の瞳に浮かんでいるのは疑惑の色。相当に疑われているようである。この状況を作っている私の誤算が、ここにあった。

軍とG & K社は提携関係にある筈なのだが、どうも友好的とは言い難い雰囲気なのだ。提携する程なら、表にしる裏にしる袖の下を通す程度にズブズブであると見込んでいた。なので、行動の結果に利益さえあれば、多少の問題行動は気を利かせて目を瞑ってくれるのを期待していた。

しかもどうやら、市街地で鉄風雷火の花火大会を開催したのが一兵卒どころではなく、軍用戦術人形だから配慮をしていないという気配でもない。

今回の一件に、軍が関与しているのではと疑っているようなのだ。

「偶然とは、そういうものかと思いますが」

とはいえ、実情がどうあれ私は無関係なので。これは偶然だと言うしかないのである。私の言葉が信用できないと訴えるように、指揮官の細められた目が見据える。

説明するのは骨が折れそうだ、うんざりする。かと言って説明しないわけにもいかない。

「さて、と……何から説明しましょうか……」

こちらも考え込む素振りを見せ、真面目に対応しているのだというポーズを作る。ずつとこの調子なのだ。

一から十まで説明をしたとして、この男は私の背後関係に存在する物語を頭の中に描いてしまっている。だから、納得させるのは相当に骨が折れるだろう。

ふと、そこまで考えたところで頭の中に一つの考えがよぎる。

——そもそも、説明する必要無いのでは？

G & Kと軍の関係がこれ程までに警戒されるようなものならば、逆にその関係性を利用してしまおう、と。

私はこの事件が解決することには然程興味も無い。ならば好きなようにやらせてもらっても構うまい。

「まず、私共の行動を如何様な解釈をするのかという点について、議論する気は毛頭有りません」

それらしいことを言っておけば、私の行動に何らかの理由を見出して、勝手に納得してくれる。

彼はすでにその理由を見出しかけている。ならば寧ろ、それは積極的に利用していくべきものだろう。

生前にもよく使った手口だが、また使うことにした。

「なので、どうぞご自由に。そちらのお好きなように考えて頂いて結構です」

一変した私の返答を受け、僅かに見開かれた瞳の中に驚愕と同時に、やはりという確信めいた色が浮かんでいるのを確認して、私は笑みを向ける。

「否定がなければ、それは実質的な肯定と考えられると思わないか？」

「どちらも致しません——この件については黙秘とさせて頂きます」

「我々には治安維持のための捜査権が存在する。君の電腦のログを開示と調査を要求することだって——」

「私達は構いませんが、それは賢い選択とは言えないのではないのでしょうか？」

まあ、実際やられたら我等が主任殿は烈火の如く怒り狂うだろう。対応が面倒そうなので、本音で言えばやられたくはないのだが。

「何が言いたい？」

「単純な話です。今回の一件、貴方がたにとって窮地であったことは事実でしょう？」

「それが今の話とどう繋がる？」

指揮官は訝しげに眉を顰めながら再び問う。此方の意図を測りかねているといったところだろうか。

私は一息ついてから、言葉を続ける。

「先程ご自身で仰られていたように、此方の行動は其方にとっての助けになった。敢え

てそのようにした意図を考えて頂きたいものです」

敢えて言葉の中に圧力を含めた言葉を受け、指揮官の眼光が鋭くなる。彼には此方の意図をしつかりと考えてもらい、背後関係を想像してもらわねばならない。

実際は、あわよくば犯人を殺害できるかもしれないと思っただけなのだが、そんなことは常識的に有り得ない。私は態度に余裕を持つて彼と向き合うことが出来るというわけだ。

「……そちらの要求を聞いておこうか」

決断を下すように大きく息を吸い込んだ指揮官は、たつぷりと時間を使った沈黙の後に落ち着いた声音で言う。

「実行犯の身柄の引き渡しにも応じたって良い。無論、事件の捜査が終わり次第という条件は付けさせて貰うが」

彼の言葉には取引を急ぐような色が伺えた。要求があるならばそれを済ませ、早く手を切ろうという態度が透けて見える。

助けてあげたのに好かれないというのは、誠に悲しいものである。

「いえ、まさか」

犯人の身柄を引き渡されたとしても、処理に困るだけの私は、笑いながら首を横に振る。

「彼の処遇はそちらにお任せします。それは、この都市の警察権を有する貴方達が決定するのが道理というもの、違いますか？」

「……いや、こちらに一任してくれるというのなら、願ったり叶ったりだが……」

道理や筋合いというものは非常に便利な道具だ。利益にそれらを加味してあげれば、大抵の場合はそれに逆えない。

この場合、私が彼等に提供する——そう思ってくれているだけだが——のは、実行犯という事件解決への糸口だ。

私の発言を肯定した指揮官は表情は未だに硬い。彼からしてみればこちらへの信用は皆無なのだから、そうなるのも理解できる。

「とはいえ、無償でお渡しするというのもそちらも収まりが悪いでしょう。ですので——」

表情を強張らせる指揮官に、法外な請求をするつもりはないのだがと内心で笑いながら、要求を口にした。

「終わったよ、指揮官」

G & K 支社の執務室。幾つかの書類を携えて、XM8は自らの指揮官へ、事情聴取の結果を報告しにきていた。

副官の入室を受け、小難しい表情で考えに耽っていた指揮官は、X M 8へと意識を向ける。

「どうだった？」

「駄目だね」

X M 8は肩を竦めながら首を横に振る。

「あの男は実行犯というだけで、ただの捨駒。戦術人形の調達も襲撃計画も、別の何者かが用意したらしい」

「なら、情報部への欺瞞工作も……」

「十中八九、そっちの仕業だろうねえ」

X M 8は首を横に振る。

「逮捕される直前まで連絡を取り合っていたとあるが？」

「性別も、電話越しだからよくわからないとか言っている……まあ、もう少し絞るつもりだけど。これ以上の情報は連絡に使用していたという端末と、戦術人形の残骸の調査結果次第になる」

「そうか……」

やはり、といった表情で指揮官は難しげに口元を歪める。X M 8が語った内容は、彼が想定しているものと大差なかった。

現場だけで解決出来るような事件であれば、十把一絡げにできるような連中が相手であるのなら、そもそもG&Kの情報部が欺瞞情報に踊らされるような事にはならない。

軍の関与があるとなれば、それにも納得ができる。

「ところで、指揮官の方こそどうだったんだ？そっちの方が本命だろう？」

「まあ、そうだったのだからなあ……」

なんとも歯切れの悪い反応にXM8は頭上に疑問符を浮かべる。自分の指揮官は迂遠なところこそあれど、結論ははつきりと出すタイプだ。そんな彼がこのような態度を取っているのは、かなり珍しいことでもあったからだ。

そこで、一つの可能性を彼女の電脳が導き出す。確かにそれならば、彼がこのような態度になるのも納得がいく。

「私達が軍の調査をしてる事について何か言われた？」

「いや、その件についての言及はなかった」

だが、その推測は外れていた。否定を示す返答にXM8は余計にわからなくなると同時に、少しの安堵をしていた。

この司令部では通常業務の他に、独自の業務があった。

鉄道輸送される軍需物資や人員の流れ、独自にリクルートした協力者、偶然にも受信してしまった無線通信等々。それらから得た情報を纏め本社へと報告する。

そういった、非公式な業務である。

今回の一件、軍に嵌められるという事態であるならば、少なくとも彼らは身に覚えがあった。

今回の鎮圧行動に託けて司令部に乗り込まれるというのが、彼らにとつては想定し得る最悪の事態であった。

故にこそ、当事者たる軍用人形二体を早急に確保し、監視下に置いたわけなのだが、支払ったリスクに対して得られた情報は、殆ど無い。

「どうにも、掴めん奴だった」

「掴みかかったのか？」

「いや、そういう意味ではなくてだな」

指揮官は、大真面目に驚いた様子を見せるX M 8に苦笑しつつ、犯人への事情聴取資料へと目を通していくが、書いてあるのは、報告通りにどれも役に立たなそうな供述ばかりであった。

資料を一枚ずつ捲つていくと、何か資料の隙間からこぼれ落ちた。

「ん？」

それは、綺麗に何重かに折り畳まれた手のひらサイズの紙片だった。何か、と思いがら指揮官は拾い上げる。それなりの厚みが指先に伝わる。

あつ、とX M 8が小さく声を漏らした。まさに思い出したといった様子で彼女は説明を始める。

「それ、今回の応対で掛かった費用の請求書らしい」

「応対……誰の応対だ？」

「ほら、あのAK—15とかいう戦術人形の聴取をしてる間に待たせてた方……サブリーナだっけ？」

「ああ、思い出した」

得心がいった指揮官は、サブリーナと名乗っていた方の人形を部下に預けた際、丁寧にもてなすようにと伝えていたのを思い出した。

どうやらこれは、その際に掛かった費用を請求するものであるとのことだ。

渡し方と形態に疑念を懐きつつも、指揮官は折り畳まれた請求書を開いて、開き、また開く。繰り返し度に長大化する領収書に、指揮官の顔が次第に強張っていく。

数十秒掛けてようやく印刷面と対面した指揮官の目に飛び込んできたのは、ハンバーガーショップのロゴから始まるテンプレート出力と、無数に列挙される商品名の数々——そのどれもがセット注文であった。

「これ、経費で落ちるよな……？」

彼の問に答えるものは居ない。

G & Kに所属するこの指揮官は、軍が嫌いになった。

12話。ERRAND

「まさか、最初の報告が市街地戦闘とはな」

上げられた報告に目を通したカーターが漏らした言葉には、若干の驚愕が混じっていた。

軍用新型戦術人形運用のための実験小隊。戦力追加の手回しを行った彼は、当然ながら動向の報告を副官に命じていた訳だが、監視を始めてから初の報告が市街地における対テロ戦闘になるというのは、流石に想定外であった。

「だが、結果として見れば悪くはない」

迅速な行動と、戦闘行為における二次被害の少なさ。それらは評価に値するものであるし、何より軍属であることを明かしながら行動していたことが素晴らしい。

そのお陰で、G & K社の手により鎮圧されたとして表向き報道されている今回の事件が、彼女らに救助された民間人によって、実態は軍が動いて対処したとして浸透しているという。そのお陰で、民間レベルでの世論は軍に対して好意的な方向へと流れているという。

カーターが推し進めている計画も考えれば、市民から軍に向けられる信頼は厚いに越

したことはない。

彼女らの行動が今後も自分に利する可能性があるのならば、多少の根回し程度の労力は割いてやっても良いだろう。

そう判断したカーターは机に備え付けられた受話器を手に取り、ある部署の呼び出しを行う。

「カーターだ。局長に話がある」

『先日発生したテロ事件はG & K社の迅速な対応により、最小限の犠牲者の中で鎮圧されました。実行犯の身柄はG & K社により確保されており、同社の広報官は会見において、背後関係も含めた全ての事実が明らかになるだろうとの声明を発表しています。これに対して市民達からも高く評価する声が——』

誰かが点けたままにしていたテレビは延々と、今最も熱いニュースを流し続けている。

報道はループ再生のように同じ内容を繰り返し返し、誰がいつ見ても同じ内容が伝わるようにという報道姿勢は、今回の事件の重大さを物語っている。

とはいえ、報じられる内容は、一度聞いてしまえば覚えてしまえる程に薄い。

ある意味では、その薄さこそが最も誠実で揺るぎない事実を伝える報道と言えるのか

もしれません。

実に、身に覚えのある話です。

どうも皆様こんにちは。AK-15です。今私は第31独立遊撃機械化実験小隊が拠点とする基地の食堂にて、降つて湧いた余暇を楽しんでいるところです。

あの日、G & Kから解放された私達を待っていたのは偉い人からのお叱りの言葉でした。

あわや我が部隊の存続という声まで上がりかけたらしく、この部隊を疎んでいる何者かが居るようです。

それが誰なのかはさて置き、捨てる神あれば拾う神ありという極東の諺にあるように、執り成してくれた偉い人も居たようで、結果としては大事にはならず済みました。該当機体の一時的な運用停止——つまりは謹慎処分という、実に寛大な処置が通達されたのが先日のこと。

予定されていたデータ取りの為の出撃計画は合法的に白紙となり、私は大義名分を得て退屈を弄んでいるのである。

緩やかに官給品の合成コーヒーが注がれたカップを傾けていると、懐の端末が震え呼び出しを告げる。

近距離無線通信モードで端末と繋ぎ、通話に応答する。電腦が有するマルチスレッド

の一つが、端末から転送されてくる音声と映像のデータをビデオ通話のフォーマットで再構築する。

電脳内に映し出されたのは我々が敬愛すべき主任殿であった。

『AK-15、今何をしているのかね?』

開口一番に、そう聞かれた。

私にとつては不穏と不穩の象徴である主任殿だが、今ばかりは違う。

彼ですら逆らえない上からの命令により、私は基地内で大人しく待機せねばならないのである。

その安心感による心理的余裕は、合成コーヒーが放つ科学的な風味とアクセントを気にしなくなる程度に精神的なスパイスとして機能し、綽々たる態度でカップに口をつけながら応答した。

「勿論、与えられた処分に従って肅々と基地内で謹慎任務を遂行中ですが」

『何が遂行中か、食堂でだらけているだけではないか。所員が呆れていたぞ、まるで反省をしているとは思えない、とな』

失敬な。私はちゃんと反省している。

独断専行の危険を押しして行動したにも関わらず、殺人という最大目標が未達で終わってしまったこと。

シチュエーションは出来ていたのだが、時間をかけすぎてしまったこと。次はシチュエーションができたらずくに殺害する。

「それで、通信を入れてきたということは何かあったので?」

世間話もほどほどに、私は本題へと切り込んでいく。

この男は必要がなければ知的好奇心が齎す衝動のままにデータ収集と分析に没頭しているような人物だ。幾ら自分の作品とはいえ、退屈を持って余している戦術人形に世間話や文句を言うために通信してくるというのは考え難い。であれば、何かあったと推測するのが当然だが、生憎と私に心当たりと呼べるものはない。

『任務だ。しかも上層部直々のな』

「上層部からの任務ですか、実に喜ばしい話ですね」

思わず眉間に皺を寄せてしまったが、それは口にしていたコーヒーが苦すぎたからである。決して、このタイミングで下される上層部直々の任務という言葉に嫌なものを感じたからではない。断じて、絶対にならないのである。

『そうだな、君が先日行つた積極的な上層部へのアピールが叶つた結果と言えるだろうな?』

刺々しい皮肉。上層部直々の任務とやらを、彼は快く思っていないらしい。彼の性格的なものであると言えなくもないが、それとはまた違うように思える。

合成コーヒーの独特の風味が急激に強まったように感じられ、思わず眉を顰める。

「それで、任務の内容は？」

無然とした顔で、吐き捨てるように彼は答えた。

『難民地区への調査だ』

任務を与えられた翌日、私は旧式の軍用四輪駆動車の助手席で、窓の外を流れていく荒涼とした平野のような景色を眺めていた。

第3次大戦よりも遙か以前に整備された道路は、不定期に揺れが起こる程度には状態が悪く、この地域から政府の興味が失われて久しいことを強く物語っている。

「本当に難民居住区なんてものがあるのでしょうか」

隣から聞こえてきた声に視線を向ければ、運転席でハンドルを握っているサブリナがいる。

相変わらず無表情に近い面持ちだが、若干の飽きのような気配が滲んでいるように感じられた。

「一応、公的にも存在している。民間の支援団体が定期的に食料品やらの物資を定期的を送っているらしい」

「その定期便を届けに行つたトラックが帰還しなかつた。だから難民居住区の状況を調

査する……やはり今回の任務、私達の仕事ではないのでは？」

我が部下は今回の任務が気に入らないようである。気持ちは理解できる。国内の事件の調査や捜査などは情報収集を担当する部署が存在する。

つまり、本来であれば軍の出番ではないということだ。

しかし現実には軍が調査を担当し、我々が送り込まれた。何かしらの背後関係を疑いたくはなるが、情報が足りていない状況で下手なことを言うのは憚られる。

「武装勢力に占拠されている可能性もある。ましてや都市の浄化壁の外は須く危険地帯だ。そんな場所に政府の役人を送り込むわけにも行かないのだろう」

行きたがる役人もいないだろうけど。口には出さずに頭の中で独りごちる。

「それは……そうですが」

「今回の任務は独断専行に対するペナルティという側面もあるものだから、そこまで深く考え込む必要はない。軽いドライブのつもりでちやちやと終わらせれば通常任務に復帰できるだろうよ」

「……了解」

しこりの残る反応ではあったが、一応の納得をしてくれたサブリナから意識を外し、窓に視線を戻す。

部下の扱いというものを考える。

戦術人形であるから命令には絶対服従というのは容易で良いが、それは不満不服があつても従うということの裏返しでもある。

メンタルの状態が命令遂行の妨げになると考えたくはないが、やる気の有無というのは無視出来ないのは私自身が実感するものである。

己が一般的な戦術人形から乖離した存在という自覚はあるが、純然たる戦術人形の思考など知る由もない以上、どの程度乖離しているかというのは決して測り得ない尺度だ。

そうである以上、他の戦術人形たちもやる気が影響を与えると考えて動くのが妥当だと言える。

部隊員を求めたのも、弾除けになる存在が欲しかったただけなのだが、まさか此処まで小難しいことを考えることになるとは。住所不定無職の殺人鬼をやっていた前世との違いに内心で嘆息するが、部下の動きが私の生存率に直結しているからには、真面目に考えなくてはならない。

「隊長」

と、そんなことを考えていると再びサブリナが声を上げた。

振り向けば彼女の視線は進行方向を向いている。何かを見つけたらしい。私は彼女の視線を追って望遠モードで遠くを見る。

「ああ、私も見えた」

「事故でしょうか？」

「そうであることを祈りたいね」

車内の空気が張り詰める。

視界に映し出されたのは、道路に横たわる大型のトラック。事前情報通りの型式、ナンバーと一致する。

転倒しているトラックの近くに車を止めさせ、武装を手にしながら簡単な検分を行う。明確に異常と言える点はすぐに見つかった。

「サブリーナ」

「なんででしょうか？」

「内側からコンテナごと車体を真つ二つに破壊するには、どれくらいの力がある？」

軽いドライブのつもりという先程の発言は、撤回しなくてはならないかもしれない。

13話. INTERRUPT

「どうでしたか？」

「駄目だね、何も残ってない」

周囲への警戒を任せていたサブリナからの言葉に首を横に振り、調査した結果の内容を伝える。

まず調査の結果から言うと、コンテナの破壊は重機に相当する力によつて内側から行われたものであると断定できた。

しかし、何故コンテナの中にそんなものが居たのかは不明である。

なにせ、コンテナ内面には摩擦痕や、内側からの凹み傷があつたが、中身は綺麗さっぱり消えている。事故当時に載せていた荷物によるものも含めて全て、だ。

更に言えば運転手の遺体もない。事故後に彼らがE. L. I. Dになつたかとも思つたが、運転席の損傷は酷く即死の可能性のほうが高い。

つまり――

「貨物も死体も誰かが運び出した、ということですか？」

「動かないものが消えてるんだ、その可能性が高い」

「では、上にはそのように報告を？」

「ああ……更には消えた貨物の行方を探せ、とのことだ」

「任務続行ですね、了解しました」

上層部からの新たな命令を伝えると、サブリナは疑問を挟むことなくそれを受諾した。

扱いやすくて非常に助かる。

なぜ民間団体の荷物の調査を軍の部隊が行うのかとか、そんな事を聞かれてたら返答に困るところだった。

それどころか、私が聞きたいくらいだ。

「ですが、貨物のデータはあるのですか？」

「ああ、リストを受け取っている。幸いにも、E、L、I、Dなどという忌々しい文字列の記載はなかったよ」

「笑えません」

「全くだ」

サブリナからの冷たい視線が突き刺さる。それに気付いてないように振る舞いつつ、目録の物品をサイズごとに——盗み易いものと、盗み難いものに分類する。

盗み易いもの——薬や包帯などの消耗品。

盗み難いもの——大型の医療機器。

「医薬品ならばともかくとして、レントゲン装置なんてものは場所も電力も使う。難民達が盗むには不向きだ」

「では、盗んだのは難民ではないと?」

「もしくはこれらの物品を運んでいた訳ではなかった、とかね」

サブリナの表情が一瞬こわばる。破壊されたトラック、それが可能な存在。私達の中にある一つの懸念を強く意識した仮想を頭の中に描いたのだろう。

「隊長、それは……」

「勿論、冗談だ。只の難民支援NPOがそんな訳のわからない事をするはずはない」

「とはいえ、描いた仮想がどれだけ可能性が高くとも、確証がなければ仮想の域を出ないものだ。」

「多少の皮肉を交えた言葉に、サブリナの無表情が一瞬揺らがせつつ「そうですね」とだけ返した。」

「とはいえ、場所が場所だ。交戦の可能性は常に考える必要がある」

「足りませんか? 火力」

「心許ないね」

最終的な結論を聞いたサブリナの表情が僅かに強ばる。その理由は十中八九、装備の

不十分さであろう。

大型トラックを真つ二つ。そんな事ができる存在との接触が予想される状況での我々の装備は、其処らに居る傭兵と大して変わらない。

対人戦闘なら喜んでやるが、対E・L・I・D戦闘は避けたいという、そんな具合。虎の子はあるが、数はない。

先日受領したばかりの実験装備も持ってきているが、どれだけ役に立つかは不明。不足、不明だらけの現状を鑑みるに、やはりE・L・I・Dとの交戦は避けたい。

「偽造記憶でも電脳に囁ませて、任務完了って報告する？」

「違法です」

「まあ、うん、冗談だよ」

サブリナの真つ当な返事に苦笑しつつ、彼女からの呆れたような視線を何食わぬ顔で受け流す。

私も言っただけで実際にやろうだなんて微塵も思っていない。

良くて記憶抹消の上初期化。それ以外は廃棄処分という結末が待つ選択肢と比較すれば、どれだけききな臭くとも今回の任務をやり遂げるほうが比較にならない程マシである。

「兎も角、難民居住地に行つて適当に様子を見て、今回の任務はそれで終わり。だから――

「早く居住地に行こう。口にしかけた言葉を飲み込んで、察知した異変を拾い上げるために聴覚の集音機能を最大にする。」

「隊長？」

『今の、聞こえた？』

怪訝そうにするサブリナの言葉を短距離通信で制止して確認する。しかし、彼女のセンサーはそれを拾わなかったらしい。気のせいかと自分に問うが、“俺”の直感がそれを否定する。

これを感じた時は、大抵なにかある時だ。

聴覚が拾い上げる音を蚊の鳴く声すら逃さぬよう、洗いざらい逐一解析を進める

『——間違いない』

微かに拾い上げている音の拡大と解析に意識を傾ける。

『銃声でした』

電脳間のやり取りで問いかけてきたサブリナに解析結果を送る。

拾い上げた中からサンプリングしたデータが示すのは銃声。口径はライフル程度が予測される。

いくら都市部から離れ、治安も安定しない土地であるとはいっても、ライフルが使わ

れるような状況は日常的なものではない。

「サブリナ、調査に向かうぞ」

「了解」

短く言葉を交わし、私は助手席へと乗り込んだ。

ハンドルを握ったサブリナが勢いよく車を走らせる。

「音源は北北西、」

「雑木林を抜けます、構いませんね」

「構わん、突っ込めー」

舗装された道を外れ、小規模な林へと突っ込んだことで車体が大きく揺れる。

エンジンの唸りや車体を枝々が叩く音をノイズとして除去しながら、移動し続けている音源に対して先回りを行うようナビゲーションを行う。

流石に軍用車両なだけあってか、乗り心地を犠牲にしつつではあるが、整備されてない悪路をかかなりのスピードで走り抜けていく。

「運転が上手いな……っ！」

「高級なプログラムを使わせてもらってますから」

無茶な運転だが、それを可能にしてるのは自動車運転プログラムの最新型。試しに使用えと渡してきた主任殿曰く、

「つと……い」

倒木を乗り越えた衝撃で車体が一際大きく弾み、微かに抱いた感謝の念も彼方へと飛んでいく。シートから浮きかけた身体を、天井に置いた手で押さえ込む。

そんな過酷なオフロードドライブを暫く続けていると、

追跡している対象に新たな音が混ざってくる。

解析結果——車のエンジン音が2つ。

E. L. I. Dの生体音——無し。

よし、と口元が緩む。少なくとも最悪の事態は避けられた。それどころか、この状況は私にとって非常に好ましい。

「サブリナ、飛び出せ」

「つ……い」

サブリナがアクセルを一際強く踏み込むと同時に木々の薄い場所を突き破り、大きく広がった視界に映り込んだ現状を把握する。

2台の車が走っている。片方は古い型の民間用のワゴン車で、もう一方は旧式だが軍用のハンヴィータイプ。

後者は民兵か、盗賊化した傭兵辺りだろう。廃材で補強したような銃座から上半身を出した登場員が、前方を走るワゴン車に向けて銃撃を行っていた。

殺すのならばどちらか。断然後者、民間人らしき相手を殺すのはそれが難民であったとしても角が立つ。

「距離を詰めて！」

「了解……っ」

サブリーナにはそのまま距離を詰める様に指示を出しつつ、ストックが折り畳まれたA K—15のスリングへと肩を通して戦闘準備を行う。

こちらの接近に気付いたハンヴィーから銃撃が行われるが、殆どは当たらない。当たった僅かな弾丸も車体の上を跳ねるばかりであった。

撃たれたからには応戦しなくてはなるまい。

助手席の窓から身を乗り出し、射撃を行う。

烙印システムの補正と、軍御用達の高貫通弾の恩恵は絶大である。私の弾丸はハンヴィーの車体を容易く穿ち、それに怖気づいてか敵の動きが鈍った。銃座に居た登場員も中に引っ込んでしまった。

すかさずサブリーナがハンドルを切り、半ばドリフト気味に土煙を巻き上げながらワゴンとハンヴィーの間へと強引に車体を割り込ませる。

そのまま体を捻り、身体を後方へと向ける。

ハンヴィーの運転手とフロントガラス越しに目が合った。

挨拶代わりにと微笑みかける。敵のドライバーの驚愕したような表情を見つめながら、AK-15のトリガーを引いた。

瞬間、ハンヴィーのフロントガラスが粉々に砕け散る。

無制限に連続する炸裂音はマガジンが空になるまで続き、ハンヴィーは制御を失い大きく道を外れていく。

「……………」

急速に遠ざかっていくその姿は岩陰に隠れた所で見えなくなった。

「やりましたか?」

乗り出していた身体を車内へと戻すと正面を向いたままサブリナが問いかけてきた。

「いや、仕留め損ねた」

私はその問いに首を横に振る。

トリガーを引いた瞬間、運転手達がダツシユボードの下へと身体を潜り込ませるのを見た。いくら高貫通弾とはいえ、エンジンブロックまで貫通することは出来ない。

ある程度の手傷を負わせたかもしれないが、それまでだ。

つまりは、殺し損ねた。

「……………とはいえ、あれでは追ってくることも出来まい」

昂ぶりが一気に冷めていくのを感じながら、シートに背中を預けて大きく息を吐く。

逃した魚は大きい。しかし、拘泥していても仕方ない。人間は滅つたが地球にはまだまだたくさん居るのだから。

私は自分に言い聞かせて思考を切り替え、追われていたワゴンと並走するように指示を出した。